魔法先生ネギま！～世界を思う少女（仮）～

月読

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法先生ネギま！～世界を思う少女（仮）～

【Ｎコード】
Ｎ０３１５Ｖ

【作者名】
月読

【あらすじ】
ネギの妹アリサ・スプリングフィールド。彼女は兄とともに、麻帆良に行くことになった。
さて、彼女の運命はいかに。

ホームルーム「卒業式」（前書き）

なんか、前の作品が行き詰まってしまったのでこっちを書こうと思いました。

ホームルーム「卒業式」

ｓｉｄｅ　アリサ

はじめましてアリサです。今、メルディアナ魔法学校の卒業式が終わったところです。あっ、ネカネ姉様が来ました。

「アリサ、ネギ、卒業おめでとう。」
「ありがとうございます。」
「ありがとうネカネお姉ちゃん。」

あっ、忘れてました。隣にはネギ兄様がいました。ネギ兄様は首席で卒業しました。私は２番目でした。まあ、教科書とかの内容は一回目を通せば覚えれました。禁書は中々おもしろかったです。でも、さすがに目立ちたくありませんでしたから。えっ？２番目でも十分目立つ！？それは失敗しましたね。

「あんたの修行地はどこだった？　私はロンドンで占い師よ」
いつの間にやら、アーニャがきていました。

「あっ、待ってください。今、確認します。……！」
「どうしたの？」
「日本…の……学校の……先生？」
「えっ、アリサも同じなの！」
「「ええ～！！」」

私が呟いた後にネギ兄様が反応してネカネ姉様とアーニャがびっくりしていました。

ｓｉｄｅ　ネギ

びっくりした。まさかアリサも同じだなんて。でもいいかな。タカミチもいるけど近くに知っている人がいるってのは。

「校長、なにかの間違いではないのですか？」
「そうよ、アリサは落ち着いてるからまだしも、ネギはボケでチビで……」

ｓｉｄｅ　アリサ

なんか、ひどい言われようですねネギ兄様。まあ、ここで一言いっときますか。

「決まったことは決まったことですし、仕方ないのでは？」
「そうじゃな、２人とも頑張りたまえ。」
「「はい。」」

まあ、向こうに行ったら行ったでいろいろありそうですね。私は私の好きなように動きますが。

ホームルーム「卒業式」（後書き）

勢いって怖いですね。やってしまったら止まれない。本当に怖いです。

休み時間「初期設定のプロフィール」（前書き）

主人公のプロフィールです。

休み時間「初期設定のプロフィール」

アリサ・スプリングフィールド

年齢　１０　身長　１２９？

体重　秘密

髪　金のストレート（腰くらいまで。）

目の色　エメラルドグリーン

好きなもの、人、こと

母親　ネカネ姉様　アーニャ　料理（特にお菓子作り）　裁縫　甘い食べ物　ティータイム　生徒　花

嫌いなもの、人、こと

兄　考えが甘い人　食べ物を粗末にする人　朝　孤独　女性に失礼な人

特技

剣術　裁縫　料理　精霊との会話　解呪・治療魔法　魔法付加

補助説明

ネギの妹。母親似で昔は父親の話は出てくるのに母親は出てこなかったから疑問に思っていた。ネギとは学園に入って1～2年は話をしていたが話を返してくれないのでだんだん嫌になっていった。６年前までは魔法が使えなかったがなぜか精霊たちと話せた。事件の

時に何かあったらしくその時に指輪と剣を貰った後魔法を使えるようになった。

休み時間「初期設定のプロフィール」（後書き）

アリサ

「私のプロフィールでしたがいかがでしたでしょうか？なにぶん自分のプロフィールというのは難しく思います。

さて次回ですが、いよいよ麻帆良学園に行きます。早速兄様が何か起こしそうな予感がいたします。……はぁ、まあ私は私の好きなように動きますが。でも、女性に失礼なことを言ったら蹴り飛ばしましょう。」

1時間目「麻帆良へ」（前書き）

やっとのことで投稿です。

1時間目「麻帆良へ」

ｓｉｄｅ　アリサ

アリサは今駅のホームにいる。
「ふう。」
（やっと学園の敷地に入りました。日本の方々は優しいです。それにしても兄様は何で勝手に動き回るのでしょうか？）
アリサは回りを見た。すると走っていく人を見た。走っていく人の中には、『遅刻』という言葉が紛れている。
「私も初日から遅刻はまずいですね。この人たちについて行けばいいですし。さすがに兄様もそれくらいわかるでしょう。」
そういうと、アリサは走り出した。それはそれは風のように速く。

ｓｉｄｅ　ネギ

学園に向かっている途中にアリサとはぐれてしまった。そして回りには『遅刻』と言う言葉が聞こえてる。
「たぶん、この人たちについて行けばいいのかな？」
そういうとネギは走り出した。

「今日は運命の出会いありって占いに書いてあるえ。」
「本当！！」
（んっ？あの人たち楽しそうな話をしているな。）
走っていると女の子2人が占いの話をしながら走っていた。
「あなた失恋の相が出ていますよ？」
ネギはその女の子たちの隣まで行くとそう言った。

ｓｉｄｅ　アリサ

アリサは走っていた。その途中兄の姿を見つけた。
（女性に近づいたと思ったらいきなりあれですか。本当に失礼な人です。）
そしてその女の子に何か言われている時にタカミチさんが出て来た。
「アリサ先生もこっちに来たらどうですか？」
見ていることに気付いたタカミチさんに呼ばれた。
「えっ！？あの子も？」
「ああ、君達のクラスの副担任になるよ。」
「アリサもいたんだ。」

明日菜たちが話している時、ネギがタカミチに言われたので気付いたようだ。

（何いまさら言っているのでしょうか？数分前からあなたを追いかけていましたが。ここが戦場だったら死んでますね。）

そう思いながらアリサは近づいた。すると、

「アリサ・スプリングフィールドです。これからよろしくお願いします。それと、お久しぶりですタカミチさん。いろいろと積もる話もありますね。」

アリサは挨拶をするとタカミチに嫌味げに言った。

「えっ！？兄妹なの？」

「全然似とらんな。」

「二卵性だからね。でも、まだ根に持っているのかい？勘弁してくれないかな？」

「当たり前です。まあ、それは置いときまして……」

そういうと、アリサはネギの前に行き指輪のついていない左手を広げた（指輪は右手の中指）。

パアァァン！

「「えっ！」」

ネギ、タカミチ、は驚きの声を上げた。明日菜と木乃香は固まっている。

「兄様、女性に会っていきなり『失恋の相がでている』とか失礼過ぎます！」
「えっ！でも…「でも何ですか？せめて『今、占いのお話をしていたようですが……』とか前置きを入れなさい！！」
アリサはネギに説教を始めた。

ｓｉｄｅ　タカミチ

（いきなりネギ君を叩いたと思ったら…）
「ああ、なるほど。」
「何がなるほどなんです（どす）か？」
納得したタカミチに明日菜と木乃香が聞いた。
「彼女はね、女性に失礼なことを言う人が嫌いなんだよ。それにネギ君のこと嫌っているようだし。」
「なるほど、納得。」
「でも、何で実の兄を嫌っているのかえ？」
タカミチの言葉に明日菜は十分に納得したようだ。木乃香は何故嫌っているか、気になったようだ。
「それは僕にはわからないよ。」
そういうと、タカミチは2人に近づいて言った。

「そろそろ行かないと遅れるよ？」

ｓｉｄｅ　アリサ

「いいですか？女性に接する時は……」
「はい。」

アリサはネギに注意していた。

「そろそろ行かないと遅れるよ？」
「ちょうど終わりましたから。」

アリサはタカミチの方を向かずに言った。

「僕も嫌われてるな。」

タカミチはポツリと呟いた。

「アリサ先生、言いたいこと言ってくれてありがとね。」

明日菜がアリサにお礼を言った。

「いえ、同じ女として当然のことをしたまでです。それに、あなたには何故かわかりませんが親近感がわきます。」
「親近感？」
「何といえばいいのでしょう？私と同じ力を感じます。まあ、当たり前ですか。ねぇタカミチさん？」

「！！」
「力？」
アリサの言葉にタカミチが驚いた。タカミチはその力の意味を知っている。明日菜はピンと来ていないようだ。
「いえ、忘れてください。」
そういうと、アリサは歩き出した。

ｓｉｄｅ　タカミチ

（何故だ。何故、アリサちゃんが明日菜君のことを知っている？どうやって？）
学園長室で話をしている間、ずっとタカミチはそのことを考えていた。学園長にも伝えた。
「彼女がそれを知っているとはのう。それに、どうやってそのことを知ったかが不明とは。もしかしたら、彼女は世界の脅威になるかも知れんのう。」
学園長は髭をいじりながら言った。
「では、彼女を？」
「そうじゃな、悪い芽は早いうちに摘まねばな。」
「ですが、まだ彼女の目的が……」
「では、しばらくは様子見ということで頼むぞ。」
「はい。」

そういうとタカミチは学園長室をあとにした。

ｓｉｄｅ　アリサ

今、学園長室を出て教室に向かっている。ネギは２－Ａの担任、アリサは副担任になった。担当教科は英語、アリサはネギの補佐役だ。住むところはネギが、木乃香と明日菜のところで、アリサはまだ決まっていないらしい。

（それにしても、入って早々悪役決定ですか。さすがはネギ君大好き集団ですね。）

アリサは今の学園長室の会話を聞いていたかのように思考していた。

「ありがとね。精霊さん。」

アリサは誰もいないところに向かって小声でお礼を言った。そこには、かなり小さな光が燈っていた。

ｓｉｄｅ　――――

【補足説明】

――この世のあらゆるものには精霊が宿っている。火、水、木、土、風だけでなく建物、家具、小さな機械の部品などにも。中には、自由に動き回るものや魔法世界から旧世界、旧世界から魔法世界に移

動する精霊もいる。
アリサはそんな精霊たちと会話ができる。精霊たちの間では自分たちと会話ができる人間がいるということでアリサは有名なのである。
だから、アリサがものを頼むと気前良く聞いてくるのだ。

ｓｉｄｅ　ネギ

今、教室の前にいる。中はワヤワヤ賑わっている。
「うわぁ。これが僕の生徒！？」
「あなたのではありません。私たち…いや麻帆良学園の生徒です。」
「そ、そうだね。（アリサ、ちょっと怖い。）じゃあ行こう。」
「ちょっと待ってください。」
何かと思ったらアリサが少し開いてるドアを少し開けると黒板消しが落ちてきた。
（これは有名な黒板消しトラップ！！日本にもあったんだ！）
そう思っていると、アリサはスタスタと入って行っていつの間にやら出したハサミでロープを切ってバケツを片付けている。
（こんなにトラップが！？アリサ全部見つけたんだ。すごいな。）
ネギは感心していた。
「何をやっているのですか？早く入って来て挨拶をしないと。」

「あっ、うん。」

ネギは教室に入って行った。

ｓｉｄｅ　アリサ

（あの人は何をほうけているのでしょう。）

アリサがトラップを解いて入口を見ると感心の目をしている兄の姿があった。指導教員のしずな先生は若干呆れ気味に笑っている（おそらくトラップに）。

（あれくらいのトラップを気付かないで何が『立派な魔法使い《マギステル・マギ》』でしょうか？初歩中の初歩ですよ？戦場だったら確実に死んでますね。これだから勉強はしても実戦のないアマチュアは。）

いつまでもボケッとさせているわけには行かないので、アリサは声をかける。

「何をやっているのですか？早く入って来て挨拶をしないと。」

「あっ、うん。」

そういうと、ネギは中に入って来て挨拶をする。

「今日からまほ…英語を教えることになった、ネギ・スプリングフィールドです。よろしくお願いします。」

続いてアリサが挨拶をする。

「（この人、最初から危ないですね。）今日から英語の補佐役を勤めさせていただく、アリサ・スプリングフィールドです。よろしくお願いいたします。」「ということでこの子たちが今日から担任と副担任です。一応教員免許は持っているけど、見ての通り子どもよ。お手柔らかにね。」

しずな先生が後に補足説明をした。すると、一瞬静かになった。

「「「「キャー。」」」」

「いいの、この子たち貰っちゃって。」

「上げたんじゃないからだめよ。」

「どこから来たの？」

「ウェールズの山奥から。」

ｓｉｄｅ　明日菜

（まさかトラップを解除までして通るとはね。）

明日菜は、少し驚いていた。１０歳なんだから1個くらい引っ掛かると思っていたのだ。

（まあ、あのネギっていうガキが先だったら確実に全部引っ掛かっていただろうけど。）

そんなことを思っていると、クラスの一人のエヴァンジェリンさんが教室から出て言った。

（またサボるんだろうな。）

そんなことを考えていると、アリサちゃん（何となく息が合うのでアリサは認めている。何て呼んでもいいと言われたのでアリサちゃん）が少し外の空気を吸いたいと言って教室の外に出ていった。

（なんか気になるな。）

私はアリサちゃんの後を追いかけて教室を出た。

side　エヴァ

奴の子と聞いたからさっきまで教室にいたのだが、騒がしくなって来たのでサボるために廊下を歩いている。

「（嬢ちゃんの方は中々だが坊やはダメダメだな。）……で、なんの用だアリサ・スプリングフィールド！」

「ばれてましたか。」

私が名前を呼ぶと、金髪にエメラルドグリーンの目をした少女が舌をだしながら柱の影から現れた。

「（こんな顔もするんだな。）気配は上手く隠せていたぞ？だがまだまだ甘いな。で、なんの用だ？」

「サボろうとしている生徒を捕まえに？」
嬢ちゃんは質問を質問で返した。
「そうか、ではな。」
そういって私は立ち去ろうとする。すると、
「ま、待ってください。冗談ですって！」
嬢ちゃんが必死に止める。
「で、なんの用だ？」
そういうと嬢ちゃんは顔を引き締めて言う。
「今夜、お時間貰えますか？教師・生徒の立場出なく、魔法使いとして。」
「話の内容にもよるな。理由もだな。何故ご今夜なんだ？」
私は、この嬢ちゃんに興味を持った。嬢ちゃんは私の情報（こと）を知っていてなお、魔法使いとして話こあると行ってきたのだ。
「私も後日接触する予定だったのですけれど、学園側に目を付けられたようでして。」
「奴の娘なのに目を付けられるのか？」
私は少し不思議に思った。奴の子なら同じではないのか。
「奴らが見ているのは兄の方だけなので。なにせネギ君大好き集団

ですからね。」
「ぷ。ネギ君…大好き…集団……ハハハッ！確かにな、こちらでも坊やの噂はよく聞こえたがお前の方は聞こえなかったからな。」
「やっぱりそうですか。たかが杖を渡されたくらいで……あんなものへし折ってやります。」
「ん、杖？（渡された？）」
「６年前に父様から　渡されたらしいですよ。」
「何…だと？その話詳しく聞きたい。今夜、時間を開けとくからその話を聞かせろ？」
「わかりました。では、今夜あなたの寮に伺います。」

ｓｉｄｅ　アリサ

エウ〝ァさんがいなくなった後の廊下に今、私はいる。
（やった、エウ〝ァさんに今夜会う約束成功。これで、村のみんなを…）
「で、明日菜さん。いつまでそこに隠れているのですか？」
私は廊下の角に話かけた。

ｓｉｄｅ　明日菜

アリサちゃんを追って来たらやっぱりエヴァンジェリンさんと話をしていた。途中、聞いてはいけないようなことを聞いてしまった。

（学園に目を付けられる？）

私は信じられない。アリサちゃんみたいな子が目を付けられるなんて。そう、考えていたら

「で、明日菜さん。いつまでそこに隠れているのですか？」

声をかけられてしまった。私はしぶしぶアリサちゃんの前に出た。

「あの…「今聞いたことは一切公平しないでください！」…えっ！？」

私はびっくりした。他になにかされると思っていたからだ。

「本来なら、記憶を消すのですがあなたには効きませんので。」

「やっぱり……え？私には効かない？（なんでなんでなんで……）」

「やはりあなたは自分の力に気がついてませんね。」

アリサちゃんがボソッと呟いた。

「力って？朝もそんなふうなこと言ってたよね？」

「えっ！聞こえたんですか？でも今、私からは言えません。」

「そう、じゃあいつか教えてよね？」

「はい。では、教室に戻りましょうか？」

アリサちゃんがそういって私は近くの教室の時計を見る。それを見て私たちがは走り出した。

「げっ、1時間目遅れるじゃん。」
「大丈夫ですよ。遅れたら私が言い訳しますから。」
「別にいいよ。そんなの。」

私はアリサちゃんの申し出を断ったが、

「だって、私のこと心配して来てくれたんでしょ？」
「！！」

私はまた驚いた。アリサちゃんが敬語を使ってない。

「だったら、かばってあげなくちゃね。」
「わ、わかったわよ。」

結局、授業に遅れてしまったが、1時間目は英語でみんな騒いでいて遅れたことに誰ひとり気付いていなかった。

1時間目「麻帆良へ」（後書き）

アリサ

「今回は明日菜さんのフラグ立て（？）になってしまいました。でも、クラスの人と仲良くなれたのでうれしいです。それと、クラスの皆さんとメールアドレスを交換いたしました。まだ私、携帯電話を持ったばかりだったので使い方が今一わかりませんがこれからなれていこうと思います。」

明日菜

「アリサちゃんが敬語を使わなかったのって心を開いてくれたってことかな？ていうか、あの時の笑顔可愛かったな……って私ったら何考えているのよ！？私は高畑先生一途なのに！！……でも可愛かった。ダメダメ……でも……」

2時間目「世界樹」（前書き）

文才が欲しいです。

2時間目「世界樹」

ｓｉｄｅ　アリサ

今、私は学園長室にいる。理由は今日から泊まるところを聞くためである。

「今日から泊まるところはこちらで決めておいた。今、その子たちが来てくれるからのう。ちと待っててくれんかな？」

「わかりました。」

目の前にいるのは学園長。髭をいじりながら喋っている。

（最初見たとき妖怪かと思いました。だって、あんなに頭が長いんですよ？以前魔法学校の後輩に見せてもらったアニメを思いだしましたよ。ぬら〇ひょん？フ〇ーザの第三形態？ていうかあの髭うざいですね？魔法で剃りましょうか？）

ガチャ！

そんなことを考えていると一緒に暮らす人が来たようです。

「それでは紹介するぞ。知ってはいるだろうが、２－Ａの「桜咲刹那さんと龍宮真名さんですね」……その通りじゃ。では、二人ともよろしく頼むぞ。」

「「はい。」」

学園長の言葉に二人は返事をしている。その間に学園長室に結界をかけて置いておいた荷物を持った。

「では、二人とも案内をお願いいたします。」
「わかりました先生。」
「そんなに畏まらなくてもいいですよ刹那さん？これから一緒に暮らすのですから、名前で結構ですよ。」
私は刹那さんにそういった。
「では、アリサ先生も敬語をやめてくれないか？」
真名さんが私にそう言ってきた。
「これは、癖ですよ。では行きましょう。」
そういうと、私たちは学園長室をあとにした。

ｓｉｄｅ　真名

今、私はアリサ先生と寮に向かっている。学園長から仕事でアリサ先生を見張ってほしいという依頼を受けた。
（何故、このような子どもを？）
私は不思議でならない。このような子どもの何を警戒しているのだろう。寮に着くとアリサ先生が言う。
「あなたがたは、魔法に関係している生徒ですね？それに、人であって人でない。」

「「！！」」

ｓｉｄｅ　刹那

（何故そのことを？）

アリサ先生の言葉に私は驚いた。隣にいる真名も驚いている。

「何故って顔をしてますね。相手の本性を見破るのは初歩ですからね。」

アリサ先生はたんたんと答えた。

「でも、どうやってわかったのですか？」

私はそれが不思議でならない。するとアリサ先生は、

「気や魔力の流れ……」

「えっ？」「何っ！？」

意外な返事が帰ってきた。

「生きとし生けるもの全てに気や魔力が流れているのは知ってますか？」

「ああ。」

アリサ先生は突然問いかけてきた。私もそれは知っている。

「その流れ方は人によって多少違いますがだいたい同じなんです。ですがあなたがたは決定的に違うところがあります。それは、あなたがたが一番おわかりでしょう？」
「なるほど、力の流れ方か。いままで注意していなかったからな。」
この時、私はすごい人だと思った。人の力の流れを感じれるということはそうそう身につけれるものではない。
「まあ、あなたがたがなんであろうが私の生徒には変わりありませんがね。後はどう思うかは本人しだいですよ、刹那さん？」
「！！な、なんでそれを！？」
私の悩んでいることを遠回しにいったアリサ先生。
「さあ、なんででしょうね？」
アリサ先生ははぐらかした。
「刹那、そろそろいこう。みんなが待っているぞ？」
真名がそういった。
「そうでした。アリサ先生、一旦教室に行きましょう。みんなが、あることの準備をして待ってます。」
「あることってなんですか？」
「行ってからのお楽しみです。」
私ははぐらかされたののお返しができたと思いました。

ｓｉｄｅ　アリサ

今、教室に向かっている途中です。相部屋の二人は先に行くと言って今は一人で行動中。

『……か』

「んっ？」

不意になにかの声が聞こえたようなきがした。

（こういう場合は精霊であることが多いですね。）

私は、声の聞こえる方に向かった。

ｓｉｄｅ　明日菜

買い出しの帰り途中、教室に向かって歩いているとアリサちゃんを見つけた。

（刹那ちゃんと真名さんが教室に来るように声をかけたはずだけど……）

アリサちゃんが向かっているのは教室ではない。私はアリサちゃんの後をつけることにした。

ｓｉｄｅ　アリサ

声の聞こえる方に来たらそこは世界樹の根本だった。

「私を呼んだのはあなた？」

私は根本に手を当てて目を閉じると尋ねた。

『えっ！』

驚いたような声が返ってきた。

「『誰か。』って呼んでいたでしょう？」

私は優しく尋ねる。

『初めて声が届いた。では君が精霊たちが言っていたアリサ？』

「ええ。多分そのアリサでしょう。」

『やっぱり、君なら声が届くと思った。お願いがあるんだけど…』

「ちょっと待ってください。」

私は世界樹の言葉を止めると、

「明日菜さんそこにいるのでしょう？」

ｓｉｄｅ　明日菜

アリサちゃんの後をつけて来たら世界樹の根本にきた。
（こんなところで何をするのかな。）
黙って見ているとアリサちゃんは木に話かけている。
（木と話してるの？）
そんなことを考えているとアリサちゃんに呼ばれた。
「明日菜さんそこにいるのでしょう？」
私は物陰から出るとアリサちゃんのとこにいった。
アリサちゃんのところまで行くとアリサちゃんは私の手を左手で握って右手で世界樹の幹に手を当てた。
『この人は？』
「！」
私は驚いた。今まで何も聞こえなかったのにいきなり頭に直接響くような声が聞こえた。
「神楽坂明日菜、私の生徒です。」
『そうなんだ。』
アリサちゃんは平然と話している。
「世界樹の…声？」
「そうですよ。私を通して明日菜さんに聞こえるようにしたんです。

」

私の疑問にアリサちゃんは説明付きで答えてくれた。

「でも…なんで？」

「なんででしょう？不意にそうしたいと思いました。」

アリサちゃんもなんでかわからないらしい。

（これって、信頼されてるってことかな。）

そう思うと私はうれしく思った。

ｓｉｄｅ　アリサ

（何故でしょう？私は何故明日菜さんを呼んでしまったのでしょう？）

普通なら、巻き込んではいけない守るものなのだが、私は自分に疑問を持った。

（今はそれよりも。）

「お願いってなんですか？」

世界樹の言ったお願いが　気になった。

『私の意識だけでいいから、外に出たいんだ！』
「何故外に？」
『動物みたいに動き回ってみたい。』
「なるほど。（単純ですね。）じゃあこうしましょう。外に出たら私の使い魔として行動してもらいます。あなたには知識もありますから。」
『構わない。』

世界樹の答えは即行にきた。
すると私は世界樹から手を話した。

「どうやるの？」

明日菜さんが不安そうに尋ねてきた。

「このぬいぐるみに意志を移します。大丈夫、すぐに終わりますから。」

私は今日の昼休みに生徒から貰った猫にコウモリの羽の着いた。ぬいぐるみ（ニャン〇イア）を出した。

「少し離れて下さいね。」
明日菜さんを少し離すと私は目を閉じて集中した。

「では、【精霊の歌（スピリット・ソング）】」

私が唱えると私の身体に不思議なオーラが漂った。

「これはなに？」

明日菜さんが聞いてきた。

「【精霊の歌】と言って魔法効果を高める魔法です。私が独自で編み出しました。それと、普段の身体能力強化程しか魔力を使っていないので気付かれることはありません。」

「そうなんだ。」

「ではいきます！《スピリット・ソウル・マイ・ピース》【精霊よ　汝の力を使い　彼の者の魂魄を此に縛り上げよ　心身交換（マインドチェンジ）」

私が呪文を唱えるとぬいぐるみが少し光った。その光が消えると、

「おお、本当にぬいぐるみの中に入った。どうやったの？」

ぬいぐるみが喋り出した。

「封印と解呪の魔法を応用して使いました。封印で意志をぬいぐるみに封じて解呪で身体を動かせるように、あと本体から魔力の供給もできます。」

「そうなんだ凄いね。」

本当は凄いだけではない。なんせ、今のような応用はそう簡単にはできない。これもアリサの力の一つである。

「では使い魔になってくれますね？」

「了解ニャ！」

「ニャ？」

明日菜さんがぬいぐるみの語尾に着いたものが気になったようだ。

「この姿だから語尾につけるニャ！その方が面白いニャ。…そうだ

主、名前を決めてほしいニャ。」

確かに名前を決めないとなにかと不自由だろう。

「…名前ですか。……ワルツ……でどうですか。」

「アリサちゃんその由来はなに？」

明日菜さんが名前の由来を聞いてきた。

「世界樹を世界の木＝ワールドツリー略してワルツです。」

「それはちょっと…「それでいいニャー！！」…えっ！」

「主がつけてくれたからそれでいいニャ。」

私の考えた名前でワルツは満足してくれたようです。

「…そういえば、なにか忘れているような。」

「確かになにか……」

二人は少し考え混んで。

「「ああー！！」」

「どうしたニャ？」

私たちが声を上げて驚いたワルツが何事かと聞いてきた。

「ワルツ今何時かわかりますか？」

「えっ！？６時半だけど？」

「６時半まだ間に合う…って６時半？」

二人が此に来たのは６時１５分頃。あれだけ話をしたりしていたの

に15分しかたっていないなんてありえないと私は思いました。

「ああ、説明忘れてたニャ！僕の根本に来るとニャ、時間の流れが遅くなるのニャ。」

「そうですか。びっくりしました。そうそう、人の前ではあまり喋らないでくださいねワルツ。話がある時は念話で。」

「了解ニャ！」

「明日菜さん先に行っててくださりませんか。少々用事を思い出しましたので。」

私は明日菜さんが現れた頃から感じていた気配をどうにかしたいと思い、明日菜さんを先に行かせようとしました。

「えっ！？用事って。まさか危ないことじゃあないわよね。」

「（鋭いですね。）大丈夫、職務です。」

「わかった、みんなで待ってるから早く来てね。」

「ええ。」

side　エヴァ

奴の娘に少し興味を持ったから茶々丸をつけさせていたが。世界樹の根本でなにかやってると連絡を受け私は世界樹の根本に向かった。

「これは、驚きだな。」

「はい、異例です。」

（世界樹の意志と離すだけでなく、他の物体に移動させるとはな。）

私は面白いものを見つけたと思った。

「で、タカミチよあれを見てどうする？」

途中でばったりあったタカミチに話しかけた。アリサは明日菜がいった後背伸びをしている。

「とりあえず学園長に報告を――――！！」

タカミチが踵を返そうとした時頭上から3人に向かって【魔法の射手】が一つずつ飛んできた。エヴァと茶々丸は難無く避ける。タカミチはぎりぎりで避けた。そしてアリサのいた方を見るがそこは既にいない。

side　アリサ

「どこにいった？」

タカミチさんがキョロキョロと回りを見渡している。それを上から見て笑っている。エヴァンジェリンさんも時折視線をこちらに送りながら面白そうに見ていることからここにいることに気付いている。

「すみません。あまりにしつこくつけられていたので学園（どこか）からの暗殺者　かと思いました。」

私がそういうとタカミチさんは何故そのことを！？と言うような顔を、エヴァは気を引き締めてタカミチさんを睨んだ。

「ひどいですよね。私が過去を知っているだけで悪役にしようとしてますし。どうせ今の世界樹のことだって頼まれたことなのに私が“世界樹から魔力を得るために意志を盗んだ”とか報告するつもりだったんでしょう？」

「！！」

私の言葉にタカミチは少し眉間がピクッと動いた。

「貴様ら狂っているな。」

エヴァンジェリンさんはタカミチさんの顔で私のいったことが本当のことだと悟ったらしい。

「まあ、６年前のあの日からこうなるのは決まっていたのでしょう？」

「…」

私は無言の肯定と悟り話を続ける。

「６年前に兄が父の…いやネギがナギの杖を受け取った時から――――

ｓｉｄｅ　タカミチ

僕はアリサちゃんの言葉に何も返せない。その時…

「ですが、あなたたちは知らない。あの夜私がどうしてたかなど。あの時以前からそうでした。あなたたちがネギにしか興味が無かっ

た。そして、不思議に思わなかったのですか？あの夜を境に私が魔法を使えるようになったことを。そして知っているでしょう？それまで何故魔法を使えなかったか。知らなかったとしても憶測はつくはずです。あなたがたがは私に流れている血を知っているのだから。」その言葉を聞いて僕はアリサちゃんも同じようにあの夜誰かとあっていたと確信した。

「まさか、君はあの夜…。」

「ええ、大切な人に会いましたよ。そしてこの指輪と剣を貰いました。」

アリサが指にはめている指輪を見て私は確信した。彼女が誰とあっていたか。僕は膝を着いた。今まではそんなに注意して見てなかった。自分たちの対応を見て言っても信じてもらえないと思ったのか。いや実際言ったのだろう。だけど僕たちはそんな彼女の言葉が耳に入っていなかった。

「すみま…せん。」

ポロッとそんな言葉か落ちていた。

ｓｉｄｅ　エヴァ

（腑に落ちない、何が一番腑に落ちないかっていえば…私が空気ではないか！！）

隣にいる茶々丸は録画中とか呟きながら意外と楽しそうだ。

「そんなことを言っても時既に遅しです。」
「それはどういうことですか？」
何やら面白い展開になってきた。
「私の覚悟はもう決まっています。」
「覚悟とは？」
「知りたいですか？」
「はい。」
「私も知りたいな。」
私はその覚悟とやらが気になった。
「エヴァンジェリンさんには今夜話すつもりでしたけど？」
「今じゃダメなのか？」
「ちょっと待ってください。ワルツ今何時ですか。」
言うか言わないかは時間次第らしい。
「外では６時５０分ニャ！」
「７時までに教室に行かないといけないのでやっぱり今夜で。タカミチさんも聞きたいなら今夜エヴァさんの寮で。」
「わかりました。」
文句を言う前になんか気持ち悪いと私は思った。そこでアリサが
「敬語やめてくれません？なんか気持ち悪いです。」
「そうかい？」
（（そうだ（です）！！））

この時アリサとエヴァの心が初めてシンクロした。茶々丸は隣でまだ録画中とか言っている。

2時間目「世界樹」（後書き）

エヴァ「なあ、茶々丸？」
茶々丸「何でしょうマスター」
エヴァ「今の話ってほとんど私たちの役目ないよな？」
茶々丸「私はいい動画が取れたので十分です。」
エヴァ「…そうか。」
茶々丸「マスター？」
エヴァ「何だ？」
茶々丸「マスターは教室にいきますか？」
エヴァ「気分次第だな。茶々丸よ、お前は行きたいのか？」
茶々丸「……」
エヴァ「そうか楽しんで来いよ！！」
茶々丸「…はい。」

3時間目「歓迎会＋実力検査」（前書き）

戦闘描写が難しいと改めて思いました。

3時間目「歓迎会＋実力検査」

side　アリサ

教室の前に行くと真名さんと明日菜さんそれに兄がいました。

「すみません遅くなって。」

「やっと主役が揃ったな。やっぱりついておけばよかったかな。」

「アリサちゃん早く早く。」

私の言葉に真名さんはたんたんと、明日菜さんは関係無しに私を急かした。

「あのさ、アリサ？」

「何でしょう？」

兄が話しかけて来たので私は気分が落ちました。

「明日菜さんに魔法のこと知られちゃったんだけど。」

「それで？」

私は無表情になって答えた。

「記憶を消そうと思ったら大丈夫誰にも言わないからって言われた。」

「なら、それでいいんじゃないですか？」

私はただ、無表情で答える。

「でも――「早く入りましょう。皆さん待っているみたいですので。」

そういうと、私はドアの前に行く。

ｓｉｄｅ　ネギ

（どうしよう。明日菜さんに魔法のことばれちゃった。そのことをアリサに話したら怒ったような口調で言われた。そりゃそーだよね、早速ばれちゃったから。）

そんなこと考えている間にアリサはドアの方に行く。それを追って隣に行ってアリサがドアを開くとそんなこと考えていられなくなった。

ｓｉｄｅ　アリサ

私がドアを開けると大きな声が聞こえてきた。

「「「ようこそ、ネギ先生、アリサ先生！！」」」

「「えっ！？」」

私と兄は素っ頓狂な声をあげてフリーズした。。

「アリサ先生とネギ先生の歓迎会だ。」
「主役は真ん中へ。」
真名さんが短く簡潔に説明してくれたが、私はフリーズしている間に教室の真ん中に運ばれた。
「それでは報道部、朝倉和美の質問タ～イム♪朝できなかったからね。」
ボイスレコーダーを持った朝倉さんが来たので私は気を持ち直した。
「まず一つ、身長と体重は？」
「体重は２８０００００００００００００ｐｇ（ピコグラム）、身長は……ボソッ……です。」
私が答えた後回りにいるほとんどが頭にはてなマークが浮かんでいる。
「ピコって何アルカ？」
「聞いたことないでござるな。少なくとも、なにかの単位というのは間違いないでござるな。」
「身長聞こえなかったよ？」
「でも史伽私たちと同じくらいだよ？」
様々な反応が聞こえた。そこでエヴァンジェリンさんが、
「茶々丸、聞こえたか？」
「はい。１２ｋｙ―「わあああ。言わないでください！！」

私は気にしている身長を言われそうになったので必死に止めた。

「ああ、気にしているのですか。」

「じゃあ仕切直して次の質問。」

空気を読んでくれた朝倉さんに私は感謝した。

「好きなものと嫌いなものは？」

「好きなものは料理、裁縫、甘い食べ物、ティータイム、花で、嫌いなものは朝です。」

「ほうなかなか気が合いそうだな。」

「はい。特に朝が苦手とか特に……」

「おい茶々丸そこはティータイムが好きなところとか言うところだぞ！！」

「はい、次〜。特技は料理や裁縫の他にありますか？」

「ええ、園芸とか……そうだ、刹那さん、真名さん、部屋になにか植物おいていいですか？」

「ああ、構わないが刹那はどうだ？」

「構いませんよ。」

「えっ、アリサ先生刹那さんたちのところにいるの？」

「ああ、学園長に頼まれてな。」

side　学園長

「ううむ。」

わしはあることを調べていた。
「彼女の実力を知ろうとおもったんじゃが。」
もっている資料にはアリサ・スプリングフィールドと書いてある。
（魔法学園の成績以外これといったものがないとは。魔力もネギの半分程度じゃし。だがそれならどうやって彼女はあのことを知ったのじゃ？）
わしは髭をいぢりながら資料を置く。
「一回彼女の実力を試すかの。」

ｓｉｄｅ　アリサ

歓迎会の後刹那さんと真名さんと寮に向かっている。
「そういえばその肩に乗っているぬいぐるみはなんだ？ただのぬいぐるみではないようだが。」
真名さんに肩に乗っているワルツについて聞かれた。歓迎会中から気になっていたようだ。
「この子は私の使い魔のワルツです。」
「使い魔？このぬいぐるみがですか？」
私の返答に疑問を持った。

「私の使い魔は意志を持った植物なんです。ワルツ喋ってもいいですよ。」
「ずっと黙っているの疲れたニャ」
私が言うとワルツは喋り出した。
「ニャ？」
刹那さんが語尾に疑問を持ったときに誰かに声を掛けられた。
「学園長が用事があるらしい。至急世界樹広場に来てほしいそうです。」
声を掛けたのは、色黒の眼鏡を掛けたガンドルフィーニ先生だった。
「こんな時間に？」
今は８時３０分。あのあと門限や片付けやらで、お開きになったのだ。

ｓｉｄｅ　刹那

「学園長、今何といったのですか？」
心配ないと言われたが私と真名は学園長に呼ばれたアリサ先生が心配でついて来た。世界樹広場にはこの学校の魔法先生が集まってた。

「だからガンドルフィーニ先生を相手に模擬戦闘をして欲しいといったのじゃ。」

なぜ？

そういう疑問が湧いた。

「構いませんよ。ＮＯと答えても引かせて貰えなさそうですから。」

アリサ先生は私にウインクをする。先生の言うとおり、回りを見ると結界が張られている。

「では始めるかの。」

ｓｉｄｅ　アリサ

学園長の言葉にガンドルフィーニ先生は袖からナイフと銃を出した。それに応えて私は影から西洋剣を出す。

「どこから出したのですか？」

「今から戦う相手に自分の手の内をさらすとでも。」

ガンドルフィーニ先生の問い掛けに私はまっとうな疑問で返す。

「それもそうですね。ダアン！」

ガンドルフィーニ先生はその言葉を境に銃を撃って来た。

ギンッ！！

私は西洋剣で銃弾を反らした。

「なかなかいいお点前ですね。」

「いやガンドルフィーニ先生だっていい狙いですよ。」

ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！

今度は連射が来る。

カンッ！！キンッ！！ギンッ！！カンッ！！

私ははそれを弾く。それを見てガンドルフィーニ先生はナイフを持って飛び掛かろうとする。私はただそれを待つ。

side　ガンドルフィーニ

銃弾を剣で弾くことは簡単ではない。連射でも無理。だからナイフで飛び掛かろうとしたが、アリサ先生は構えようとしない。負けを認めるのかと思うがそれにしてはあの顔はまだ戦う意志がある。彼女はあの形無しの状況でも何とかできるのだと悟りナイフを振り上げる。その時…

ガンッ！！

ナイフの持ち手になにかがあたり手からナイフが弾けた。

そのスキを見て彼女は反対の手を掴み膝蹴りをして銃を手放せる。

ｓｉｄｅ　アリサ

私はガンドルフィーニ先生の手から離れた銃を腕を掴みながら背後に回り込む動作と同時に空中でキャッチししながら足掛けで押し倒し関節技をきめる。そして奪った銃の銃口を後頭部に向かって突き付ける。

「そこまでじゃ！！」

学園長の制止がかかる。私は突き付けていた銃口を放し関節技から解放する。

「ナイフを飛ばした時どんな魔法を使ったのですか？」

ガンドルフィーニ先生が聞いてきた。

「何を言っている。魔法なんて使ってないぞ。」

「「「「！！」」」」

真名さんが変わりに答えた。

「やっぱり真名さんはわかりましたか。」

「当たり前だな。銃は私の武器だぞ？」

「銃が武器でもわかってない人はいますけどね。」

「たしかにな。」

「あの…魔法を使っていないってどういうことですか？」
私達の話に気まずそうな声が入る。その声の主は刹那だった。
「答えは簡単。ナイフの柄の部分を見ればわかります。」
そういうとタカミチがナイフを拾い柄の部分を見た。
「これは……銃弾？」
「何！？」
「しかもこれは私が使っている銃の弾ですよ！」
「どういうことじゃ？」
魔法ではないことはわかったが疑問が残っているようだ。
「ではヒントです。私は弾丸を切ることもできた。でもあえて弾いた。」
「それも弾丸どうしがぶつかるようにな。」
私のヒントに真名さんは補足をした。
「ぶつかるってことはまた弾ける……ああなるほど。」
「理解しました。」
「どういうことじゃ？」
学園長以外の人は納得したようだ。
「ははは、やられましたよ。まさか自分の撃った弾にやられるなんて。しかも、私の動くタイミングまで計算されているなんて。私もまだまだですね。いい勉強になりましたよアリサ先生。」
「いえ、私もまだまだですよ。」

ガンドルフィーニ先生の言葉に私はそう答えた。
「いずれ魔法も含めた模擬戦闘もしましょうよ。」
「ええ、そのうち。」
他の魔法先生の軽い挑戦に私も軽く答えた。
「だから、どういうことじゃ～？」
学園長がいまだにわからないようで吠えていた。
「あら学園長、魔法のことはわかるのにこんなこともわからないんですね。その頭は長いだけあってそういうのも知識に入っていると思ったのですけれど、やっぱり妖怪なのでしょうか？一応、人間だと思っていたのに物理の応用もできないなんて。」
「な、何！？（物理の応用じゃと！？それに数少ないわしを人間だと思っていたじゃと！？）」
それに学園長は沈んだ。特に後者のほうで。
「では私はこれで。」
そういって私は世界樹広場から離れていった。

3時間目「歓迎会＋実力検査」（後書き）

刹那「すごいなアリサ先生。戦っている間に弾いた弾の着弾地点まで計算しているなんて。」
アリサ「でもこの戦法、突拍子もないことをする相手だと向かないですよ？」
刹那「そうですね。」
アリサ「さて次回ですが、おそらくエヴァンジェリンさんとの交渉と言う名前の……ボソッ…です。」
刹那「何ですか？そのボソッてすごく気になります。それにエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルにあうって何をするのです？」
アリサ「……まだ、秘密です。」

4時間目「模擬戦」（前書き）

更新遅れてすみません。
グダグダな文かもしれませんがよろしくお願いします。

4時間目「模擬戦」

side　刹那

アリサ先生の力試しが終わった後、タカミチ先生を含め４人で帰路についている。

「あの、私の師匠になってくれませんか？」

私はさきほどの戦いを見てアリサ先生のほうが自分より上だということがわかった。それゆえの判断だった。

「めずらしく刹那が真剣だな。」

「理由を教えてくださいませんか？」

真名からちゃちゃが入ったが無視した。アリサ先生から帰ってきたのはそんな問い掛けだった。

「銃弾弾くなんて切るより難しい技術を持っていることで私より剣の扱いは上だと判断しました。それに私は護りたいものがあります。護るために強くなりたいんです。」

私は自分の考えを隠さずに言った。

「護りたいものですか…いいですよ。自分が未熟だとわかっているところで強くなれますからね。それに回りくどくないですし。」

「アリサちゃんはまっすぐな考えの人が好きだからね。」

こうして私の弟子入りが決まった。

ｓｉｄｅ　真名

さきほど刹那の弟子入りが決まった。

（いいのだろうか監視対象に弟子入りなんかして。…まあ私もなんで監視しなければいけないのかわからなくなってきたが。）

そう思っていた矢先にアリサ先生が話しかけていた。

「そういえば、いいのですか？監視対象に弟子入りなんかして。」

「「！！」」

「やっぱりアリサちゃんわかっていたんだ。」

タカミチ先生は予測していたようだ。

「どうやってわかったんですか？誰にも喋っていないのに？まあばれている時点で関係ないですね。」

「というかばれている時点で任務失敗だな。」

刹那は心置きなく弟子入りができるようで満足している。私は任務失敗で報酬がないなと考えた。

「真名さんよかったら私の仲間になりませんか報酬はこれを毎月５ダースで。」

そういうとアリサ先生は影の中から銃弾を出した。

「こ、これは二年前マホネットで一躍有名になった初級術式が組み込まれている銃弾！！」
「ええ、大気中の魔力で発動するので使用者は魔力が減らない優れものです。」
「しかもこれは特注でしか手に入らない中級以上ではないか！？」
「真名、そんなにすごいものなのか？」
「ああ、術式を組み込むのはそんなに難しくはないんだが、大気中の魔力を取り込むのはかなり高度な技術が必要なんだ。初級はともかく中級以上となるとさらにな。」
「さすが真名さん、これの凄さがよくわかってますね。形てきには銃弾の先端に効果術式、中止から後ろにかけて大気中の魔力を取り込む術式、そして対象に着弾した時の振動を察知、発動させる術式でコーティングですね。」
「何故アリサ先生が構造までも？・・・・まさか！？」
「ええ、私が作りました。かなり大変でした。大気中の魔力を取り込む術式はもちろん、有機物はともかく無機物しかも鉛弾にこれを組み込むには。」
「一人で発明したのかい？」

こんなものを作るのは一人では難しい。他人の協力も必要のはず。私はそう思ったが、その予想は裏切られる。

「ええ、ちなみに初心者向けの杖等も作成しています。これは４年前くらいからですね。」
「いつそんなことしていたんだい？報告書にはそんなこと書いていなかったけれど。」

その通りだ、魔法学校を卒業したばかりと聞いていた。というか４年前だから魔法学校に通っている時から造っていることになる。いったいいつの間に造っていたのか。という考えが皆に浮かんだ。

アリサ先生は人差し指を口に持っていくと、
「企業秘密です。」
といった。
（企業って…まあ一応企業か。）
「どうですか？私の敵にならないのなら他の依頼も受けて結構ですよ？」
そんなおいしい依頼受けない訳がない。だから私はこう答える。
「乗った。」

side　エヴァ

（さきほどの戦闘を見ていたがまさか魔法を使う前に終わらせるとはな。それに何か面白そうな話もしていたしな。）
そして私は帰る途中のアリサたちに後ろから声をかける。
「なかなかおもしろい戦い方だったな。」
「！！」
その言葉に反応して桜咲刹那と龍宮真名が反射的にこちらを見る。
タカミチは微笑みながら振り返った。
「相手に自分の手の内を見せずに終わらせたというところですかエヴァンジェリンさん？」

アリサは首だけで振り返った。
「ああ、だがあれだけではつまらん。私の家に来い。私が直々に相手をしてやる。それとエヴァでかまわん。」
「わかりました、私もあれだけで終わるとは思っていなかったので。」

それを聞くと私は少しおもしろくなった。

「おい、いいのか？わかっているんだろう？私が力を封じられていることを。」
「それをどうにかできるから相手になってくれるのでしょう？だてに長生きしている訳ではないのですよね？」
「ふふふ、ハーハッハッハ。わかっているではないか小娘！！」
「まあ、その呪いは解くつもりですけどね。」
「何？」

私は呪いを解くという言葉に反応した。

「私、解呪も得意なんですよ。でも、あまり複雑だと解析に数日かかりますが。」
「本当か！」
「ええ、構いませんよねタカミチ先生？」

アリサは声をかけると同時にタカミチの方を向いた。

「ええ、本当は3年の約束だったはずのものを１４年も縛り付けていたからね。学園長もどうにか解けないかって悩んでいたからね。もしかしたら解いたことによってアリサちゃんに対しての学園長の考えも変わるかもね。」

タカミチはそう答えた。

「でもできるのか？かなり複雑だぞ？」

「『永久石化』の解析よりは簡単ですよ。」

「「「「！！」」」」

アリサの言葉にここにいるもの全てが息を飲む。

「永久石化…ですか？」

「まさかできたのかい？」

「馬鹿な！？」

「ありえない。」

上から刹那、タカミチ、エヴァ、真名である。

「そんなことより行きましょう。それについては模擬戦の後で。ここでは話しづらいです。」

「ああ、わかった。」

その言葉で私たちは動き出した。

ｓｉｄｅ　ーーー

エヴァの家に着いた一同は茶々丸に少し説明をし、ダイラオマ魔法球の中にあるエヴァの別荘へ移動した。

ｓｉｄｅ　アリサ

私は今、エヴァさんの別荘で少し自分の力を教えている。

「は？」

「だから精霊が見えるんです。」

「いや、だって精霊って普通見えんだろ？」

絶対信じていないエヴァにいう。

「じゃあ証明します。とりあえず生きてるものには全て守護精霊が着いています。その精霊はずっと一緒にいるので過去を聞きます。あまりやりたくないのですがエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウエルのＫはキｔｅ――「ワアアァァ、わかった！！信じるからそれを言うな！」

他の３人はどうやって秘密を知ったのかを知って、『ああ、なるほど。』と言っていた。

「タカミチ先生、学園長に言うならメガロメセンブリア元老院に伝わらないようにお願いします。いろいろと面倒ですから。それに私、奴らが嫌いです。」

「たしかに奴らに伝わると面倒ですね。わかりました。」

そういうと私はエヴァさんの方を向く。

「では、始めましょう。」

「ああ。」

私は浜辺に着くと剣を取り出した。

「むっ、その剣…認識阻害をかけているな？」

「さすがにあなたほどの魔法使いにはわかりますか。『認識阻害結界解除』」

私がそう答えると、剣の輝きが増した。

「あの剣は…」

タカミチ先生が剣を見て呟いた。その剣の前の持ち主を思い浮かべて。

「なかなかいい剣だな。名は何と言う？」

「『黄昏れの剣【姫】』といいます。あっ、今回は技の準備具現化させてやりますね。」

「どういうことだ？」

「見ていればわかります。ワルツ、具現化するときの魔力供給お願いします。」

「了解ニャ。」

使い魔契約したワルツにも精霊が見えている。世界樹なので魔力はたっぷりある。

「スピリット・ソウル・マイ・ピース　我と契約せし風精　魔力を糧にその姿をここに現せ　【来たれフィレス】」

ｓｉｄｅ　タカミチ

アリサちゃんが呪文（？）を唱えると彼女の前に風の塊ができた。そして、それが弾ける。そして現れたのは緑色の髪を背中まで伸ばした少女が現れた。大きさはアリサちゃんの肩に乗るくらい。

「この子はフィレス。私の使い魔であり仲間であり友達の一人です。」

「精霊が使い魔？それにまだいるのか？」

「精霊を使い魔にするにはとりあえず精霊と話せなければいけません。それと今のところあと六人います。」アリサちゃんは律儀に説明している。彼女はいったい何をするのだろうか、その未知の恐怖心と好奇心が私の体を震えさせる。

ｓｉｄｅ　刹那

アリサ先生が精霊を具現化させている。隣にいるタカミチ先生と真名は体を震えさせている。気が付けば私の体も震えている。

（この感覚、好奇心だよね。）

隣にいる二人もそうなのだろうと思い私は目を二人に戻す。

「いくよ、フィレス！！」

『はい！！』

「！！」

アリサ先生が叫んだあとに誰かの透き通ったような声の返事が聞こえたような気がした。

（今のってあのフィレスっていう精霊の声？）

ｓｉｄｅ　真名

今、アリサ先生の掛け声に答えるような声が聞こえた。刹那が耳に手を当てているということは刹那にも聞こえたのだろう。

（声まで聞こえるように具現化させるとはわね。驚きばかりだ。）

そんなことを考えていると、アリサ先生が詠唱を始める。

ｓｉｄｅ　茶々丸

マスターとアリサ先生の模擬戦を見ていると、私のメモリーには入っていない術式が入っていました。だいたいの術式から幻術の応用のようなものと解読しました。

「我　汝の力を借り　汝と共に戦うことを望む」

『我　汝に力を与え　共に戦うことを許可する』

「『【人精合体（ユニゾン）】』」

また術式が現れました今度のは解析不能。さきほど現れた精霊が光となってアリサ先生の胸に入り込む。

「マスター、楽しそうですね。」

アリサ先生の行動に驚きつつも楽しそうにしているマスターを見て私の顔も少し綻んだ。

ｓｉｄｅ　エヴァ

私はアリサが何をするのか黙って見ていた。

（精霊を使い魔ということには驚いたがこれもまた。）

目の先には少し髪が緑がかって回りに風を纏っているアリサがいる。

「いきなりすごい魔法だな。」

「あなたが相手相手ならこれくらい最初に出さないと。」

「だが全部じゃあないんだろう？」

「いきなり全部はどうかと。」

「まあそうだな。まず小手調べに　氷の精霊１７頭、集い来たりて敵を切り裂け。【魔法の射手・連弾・氷の１７矢】」

私は魔法の射手を放つ。だが当たらないことはわかっている。私はそこから飛び上がる。すると風の斬撃がもといた場所に飛んで来た。後ろを向くと剣を構えているアリサがいる。

「！！」
「風節、桜吹雪の舞」
アリサは一瞬で私の前まで来ると技名を言った。すると幻だが桜の花びらが回りに現れる。その花びらの全てを突くように剣を突き刺して来る。
（隙がない！）
私はそれを断罪の剣で対応する。障壁を張ってもよかったが剣もユニゾンの力を持っていると突きを弾いているときに知り簡単な障壁だったら2～3秒しか持たないだろうと悟った。後ろに下がれば風の攻撃が来る。横に避けるか弾くしかない。すると突きの嵐が止んだ。
「すごいですね。風のスピードに耐えるなんて、さすが最強の魔法使い様ですね。」
「今、風でよかったと思っているよ。これで雷や光だったら耐え切れん。残り五人の内二人がそれ何だろう？」
「ご名答、やっぱりわかります？」
「アリサも奴の子どもだからな。」
「そうですか、ふう。」
そういうとアリサはユニゾンを解いた。
「なぜ解いた？」
「魔力の量はまだ大丈夫なんですが、あの状態だと風以外の魔法が使えませんので。」
「なるほど、今度は魔法勝負か。」

私はそれもおもしろいと思った。

「では、【魔法の射手・雷の２３矢】」

アリサはそう唱えると全てまっすぐに飛ばして来た。私は直撃のだけを打ち消した。

（おかしい。アリサがまっすぐ飛ばすだけなんて――――！！）

その時アリサの唇が吊り上がるのが見えた。私は直感でその場を離れる。するとさっき直進していったはずの魔法の矢がもといた場所に降り注いだ。

「私魔力のコントロールとか自信あるんです。【魔法の射手　光の５２３矢・風の５２３矢・雷の５２３矢】」

「そのようだな。【氷楯】」

合計１５６９の魔法の矢が直撃で向かって来る。それをかなり魔力を込めた障壁と氷楯で耐える。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪。」

私はすかさず詠唱する。そして矢の雨が止むと同時に魔法を放つ。

「【闇の吹雪】」

side　刹那

二人の模擬戦（というより実戦）は想像よりも壮大なものだった。エヴァさんの闇の吹雪が止んだ。アリサ先生は息をあげている。どうやら魔力切れのようだ。エヴァさんはそこへさらに魔法を打ち込む。

「氷の精霊17頭、集い来たりて敵を切り裂け。【魔法の射手・連弾・氷の17矢】」

17本の矢がアリサ先生に向かっていく。

「ハッ！！」

「何！？」

アリサ先生は剣で魔法の射手を切り伏せた。

「その剣ただの剣という訳ではないな？」

「ええ、剣であると同時に魔法発動体でもあります。今はこれに風の魔法を纏わせています。」

エヴァさんの問いに剣で切り伏せながらアリサ先生が答えている。

「すごいな。」

「とても9歳とは思えない動きだ。」

隣で真名とタカミチ先生が言っている。

ｓｉｄｅ　アリサ

（やっぱり最強の魔法使い相手は辛いです。）

私は魔力を纏わせた姫で魔法の矢を切りながら思っている。

「スピリット・ソウル・マイ・ピース　闇夜切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を喰らえ。【白き雷】」

「何！？」

障壁で魔力をかなり消費したけれどまだ行ける。それを確信しているので魔力をけっこう消費する魔法を使う。相手も来るとは思っていなかったらしく直撃した。そのスキにすかさず詠唱をする。

「スピリット・ソウル・マイ・ピース　来れ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐。【雷の暴風】」

「クッ！！」

ドオオォォン！！

「「ハァ、ハァ、ハァ」」

雷の暴風でできた煙りが晴れた。私もエヴァさんも息切れしている。そこでエヴァさんが話かけてきた。

「アリサ…なかなか…やるな。」

「最強…の魔法使い…にそんな…こと言って貰えるなんて…こ、光栄…です。」

「そろそろ…やめるか？」

「そう…ですね。さすがに辛い…です。」

私たちは途切れ途切れに喋り模擬戦を終わらせた。

4時間目「模擬戦」（後書き）

アリサ「一日が長いです。」
刹那「まあまあアリサ先生もう少しですよ。」
ワルツ「出番があるだけいいのニャ。私は出番がないニャ。」
アリサ「ワルツその喋り方で私っておかしいですよ。」
刹那「私もそう思います。」
ワルツ「じゃあおいらでどうかニャ？」
アリサ「それだったらいいんじゃないですか？」
刹那「私に聞かれても…」
アリサ「さて次回ですけど…」
刹那「スルーですか！？……まあそこは置いときますか。それで次回は？」
アリサ「次回は……何でしたっけ？」
ワルツ・刹那「「え？」」
アリサ「忘れました。では次回お楽しみに～」
ワルツ・刹那「「えええぇぇ～！！」」

＊ちゃんと考えてあります。

5時間目「力の秘密・アリサの決意」（前書き）

今回は早めにできました。
では、どうぞ。

5時間目「力の秘密・アリサの決意」

ｓｉｄｅ　―――

模擬戦を終えた二人は少し睡眠を取りに行った。その時に他の人はビーチの近くのテーブルで休憩を取っていた。

ｓｉｄｅ　刹那

エヴァさんとアリサ先生は1時間くらい休んで来ると言って城の中に入って行った。

「あの動きどう思います？」

その私たちはその間にさきほどの模擬戦のことを話すことにした。

「少なくとも魔法学校で習っただけの動きじゃあない。」

タカミチ先生はそういう結果を出した。

「私もそう思う。あの動きは実戦をしたことのある人間の動きだ。」

真名もタカミチ先生の考えに賛同した。私もそう思う。

「でも報告書にはずっと魔法学校にいたということになっているの

ですよね？」
「ええ。だからおかしい。魔法具の件もあるからね。」
「こればっかりは本人に聞かないとわからないね。」

ｓｉｄｅ　真名

動きのことはさっきので終わりとなった。
「そういえば、魔力切れだったのにどうしてあの魔法打てたのだろう？」
タカミチ先生がふと思い出したように言った。
「おそらく精霊と契約した得点だと思われます。」
飲み物を運んで来た茶々丸が言った。
「なぜそう思うんですか？」
手渡された飲み物を受け取りつつ刹那が聞き返した。
「私は魔法は使えませんが、魔力を探知する機能が着いています。そこで、アリサ先生が放った魔法に使われた魔力量は普通使われる魔力量の四分の一程度でした。」
「正解です茶々丸さん。」

茶々丸が言った後にさっき休みに行った人の声が聞こえた。

ｓｉｄｅ　タカミチ

さっき休みに行ったはずのアリサちゃんがそこにいる。

「なんで？さっき休みに行ったはずなのに。」

刹那さんがここにいるみんなの疑問を言った。

「分身体です。本体は今エヴァさんに説明しています。」

「じゃあ聞いてもいいかい？あの動きは実戦を積んだ人の動きだ。どうやって実戦を積んだんだい？」

「やはりそう来ますか。簡単です。魔法学校にいた私は分身体ですから。」

アリサちゃんはサラっと答えを喋った。

「「「なっ！！」」」

僕たちが驚いているのを尻目にアリサ先生は説明をし始めた。

「2年くらい魔法学校で永久石化を解くための情報を集めましたが見つからず世界にある魔法的な遺跡を見に行って見ようと思いました。私は気も扱えるようにしていたので魔法で分身体を作るのは簡単でした。」

「でも、分身体とわかられてしまったりしたんじゃないのかい？」
「おじいちゃんには話をつけました。」
「どうやって？」
「メガロメセンブリア元老院から送られる刺客をどうにかしてくれるならやめると。」
「「「！！」」」

ｓｉｄｅ　アリサ（分身体）

私の言葉で驚愕の顔をしている。無理もないだろう。９歳の子供に刺客を向けるなんて考えたことなどないのだろうから。

「どうしてアリサ先生に刺客を？」

刹那さんが聞いてきたので私はそれに答えるように説明をした。

「英雄の子（扱いやすい駒）は一人いれば（一つあれば）十分。そう思う人間がメガロメセンブリア元老院（あのお馬鹿さんたち）の中には多い。だから当時魔法を使えなく扱いずらそうな私は狙われた。」
「魔法を使えなかったってことは６年前の事件の前かい？」
「ええ、その時はたまたま近くを通った村人に助けて貰いました。その時私は格闘技を覚えようと思いました。」
そこでエヴァさんと私（本体）が来た。すると分身体は消えた。

ｓｉｄｅ　アリサ（本体）

「なぜか世界を回ってる私が狙われました。どこかで情報が漏れたのでしょう。」
「その刺客はどうしたんだい？」
「・・・一人だけ・・殺しました。」
「「「…」」」
「・・その前まではどんなに傷ついても気絶させるだけで頑張りました。ですが、卒業式は私が出ようと思って帰る途中、あの時は殺さなければ・・殺されてた。」

身体が奮え出した。あの時のことを思い出すと人を殺した自分が怖くなる。相手を突き刺したあの感触が今でも鮮明に思いだされる。

「・・怖い、あの感触にだけは慣れたくない。だけど！！」

いつの間にか涙と声が出てきた。しかし私は言わなければならない。だけど声が詰まる。

「慣れなければいけない・・・だろ？」
「「何？」」
「それはどういう・・」
「私だって最初は怖かったさ・・だがなお前が望む未来では必ず殺さなければいけなくなるからな。」

刹那さんの問いを遮ってエヴァさんは私に言った。

「アリサ先生の望む未来？」
刹那さんが呟いた。
「真祖になりたいそうだ。」
「「「！！」」」
三人が驚いたが私は決意を込めて説明を始める。
「この術式を見てください。」
そういい私は魔法陣を浮かびあがらせる。
「これは？」
「永久石化解呪の術式です。」
「これがですか？」
三人は術式を眺める。真名さんは魔眼も使って見ている。
「ん？これは・・・」
真名さんはなにかに引っ掛かったように一カ所を解読している。タカミチ先生もそこに集中している。
「なるほど。真祖になりたい理由がわかったよ。この術式、主に使うのは魔力じゃない。」
「僕もわかったよ。」
「すいませんわかりません。」
タカミチ先生と真名さんは理由がわかったらしい。刹那さんは陰陽

道だからわからなくても無理はない。

「刹那さんは陰陽道だからわからなくても無理はないです。真名さんのいうとおりこの術式は魔力はほとんど使いません。」

「では、何を使うのですか？」

「生命力。・・・いわゆる寿命です。」

「！！」

「後遺症を残さずに完璧に元に戻すには、魔力じゃあ無理でした。」

「だったら他の人に頼めなかったのかい？」

私の言葉に真名さんが問い掛けて来ました。

「たとえ頼んだとしても無理でしょう。術式を完璧に理解していないと発動しても失敗します。それに、これは対個人にしか効きません。この術式を発動させる時に削る寿命はその人が石になっていた年月分です。」

「だが私は理解できたが？」

「それはそこだけわかりやすいように簡易化したからです。」

「これでもかなり難しい術式なのに？」

「このまま発動したら効力は落ちます。これで元に戻せるのはネズミとかの小動物くらいです。」

「私も本物を見せて貰ったが理解できなかった。理解さえできればアリサを真祖にする必要なんてなかったのにな。」

エヴァさんが悔しそうに言った。

「エヴァさんが悔しがる必要なんてありませんよ。これは私の問題、村人を救うためなら自分が化け物になって人に嫌われようが構いません。」

「でも、真祖になるには秘術が必要なはずですよね？」

その通りである。エヴァが真祖になったのも秘術をかけられたから。
その術式がなければ真祖になることはできない。だが、

「こいつ、準備がいいのだよ。遺跡を回っていたと聞いただろう？」
「まさか・・・」
「そのまさかだ。見つけたらしい。しかも少し改良している。」

エヴァさんは憎たらしげに言った。

「「「改良？」」」
「１６歳までは成長できるようにしたんだよ。」
「そんなこともできるのかい？」
「あっ！！エヴァさんのにも干渉して今から成長できるようにできるかもしれませんよ？」
「本当か！？やれるならやってくれ。」
私の言葉にエヴァさんは食いつくように反応した。

「もうかかった後だから難しいかもしれませんが。ちなみに何歳までがいいですか？」
「それはだなやはり１６くらいがちょうどいいな。」
「ですよね！やっぱりそのくらいじゃないと。」
「あの～」

エヴァさんと話が合って回りに人がいのを忘れかけてました。刹那さんの声で戻れました。

「そうだ、これまでの話を聞いても私の弟子になることを望みますか？」
「その心は変わりません。人間だろうが真祖だろうがアリサ先生はアリサ先生です。」

「その心しかと受け止めました。その心で木乃香さんにアタックです。ちなみに精霊に聞いたりはしてません。」
「えッ！でも・・」
「さっきあなたが言ったでしょう。私は私だって。だったら刹那さんは刹那さんですよ。」
「わかりました。でも心の準備が・・・」
「それは自分しだいですよ。それで真名さんとタカミチ先生はどうします？」
「私はアリサ先生についていくよ。依頼だけじゃなく私個人の意志で。」
「僕もアリサちゃんに付くよ。さっきの話学園長にも話しとくよ。メガロメセンブリア元老院に言ったら命がないと脅しもかけて。」
「私を忘れてもらっては困るな。私もアリサに付くぞ？」
「マスターがそういうのなら私も先生の味方です。」
「ありがとうございます。皆さん。」

こうして私には頼もしい仲間ができました。

side　エヴァ

「それでは準備はいいか？」
「はい。」

私は今アリサを真祖にするための儀式をしている。この術式は自分にはかけれないらしくだから私に頼んで来たようだ。理由は『メガロメセンブリア元老院に関わっている人間には頼みたくない。』だそうだ。当たり前だな。私は魔法陣に魔力を流す。詠唱はいらないらしい。すると魔法陣が赤紫に輝きだす。

「グッ。」

アリサがうめき声をあげた。身体の構成が変わるのだから苦しいのは当たり前だ。

（私は眠っている間にかけられたからな。）

ｓｉｄｅ　刹那

私と真名はアリサ先生の儀式が終わるのを待っていた。エヴァさんがいうには儀式が終わると吸血衝動が来るらしい。真祖は吸血は必要ないが身体を完璧に構成するために新鮮な血が必要なんだそうだ。私たちはアリサ先生に血をあげることにした。最初は断られた鮮度が落ちないようにとっておいた（刺客）のがあると言って。でもエヴァさんにそんな余裕はないと言われて渋々了承していた。タカミチ先生は学園長に話をつけて来ると言ってこの空間を出た。

「グッ。」

頭を抱えたアリサ先生のうめき声が聞こえる。

「えっ！」

アリサ先生を見ていたら一瞬髪の色銀色になり光が反射して虹色に輝いているように見えた。だけどすぐに金色に戻ったので気のせいだと思うことにした。

やがて赤紫の光がおさまりアリサ先生が苦しそうにしている。

「いくよ。」

「はい。」

私たちはアリサ先生の元へ急ぐ。

ｓｉｄｅ　アリサ

儀式のが終わった。終わったと同時に喉がものすごく渇いた。

（たし・・かに、余裕・・・なんてない・・ですね。）

私は理性を頑張って保っていると刹那さんと真名さんが駆け寄ってきた。

「アリサ先生どうぞ。」

刹那さんが首筋をだす。私はそこに牙を立てる。

「ん／／」

刹那さんの甘い喘ぎ声が聞こえても気にせずに血を飲む。体内の三分の一より少し前の血液をもらうと飲むのを理性でやめる。

「はぁっはぁ／／どうしたんですか？」

顔を朱くした刹那さんが血を飲むのをやめたことに疑問を持ったらしい。

「そう・・いえば、刹那さんはハーフ・・・・でしたね。人間・・なら普通に気絶・・・している量は・・・・飲んだの・・・ですが。」

「そういうことですか。アリサ先生は私を人間として扱ってくれたんですね？うれしいです。でもまだまだ大丈夫ですよ？」「とりあえず・・休んで・・・ください。真名さん・・からも貰って・・足りなかったら、また・・貰います。」

「そうですか。」

刹那さんはなぜか少し寂しそうな顔をしていたが気にせずに真名さんの血を飲み始める。

ｓｉｄｅ　刹那

アリサ先生は結局私たちの半分くらい血を飲んだ。すると影から増血の薬と言って赤い丸薬を私たちに渡すと倒れるように眠りに着いた。今は茶々丸さんの膝枕で眠っている。

「なあ刹那？」

「何、真名？」

アリサ先生の寝顔を見ていると真名が話しかけてきた。

「アリサ先生に血を飲まれ時　、その／／なんだ？き、気持ち良く

なかったか？／／／」
「・・／／／」
真名の言葉に私は顔を真っ赤にした。
（たしかに、最初は痛いのかと思ったけど気持ち良くて頭が真っ白に／／）
「アリサは血の飲み方が上手いみたいだな。私でもまた飲まれたいと思われる飲み方はできん。」
エヴァさんが言った。
「「どうしてそう思う？／／／」のですか？／／／」
私と真名の声がかぶった。エヴァさんは顔をニヤつかせると。
「あの喘ぎ声を聞けば普通にわかるぞ？」
「「…／／／」」
私たちは揃って黙ってしまった。
その後エヴァさんにからかわれ、アリサ先生が目を覚まさないので抱えて寮の部屋に戻り、アリサ先生とどっちが眠るかを争った。今回は私が勝ちました。

5時間目「力の秘密・アリサの決意」（後書き）

茶々丸「今回この場を任されました茶々丸です。先生はお疲れの様子で私の膝枕で休んでいられます。先生の寝顔はとてもかわいいです。今日授業以外でずっと先生を見ていましたが先生は凛とされて小さいながらに美しいと思われましたが、やはり子どもかわいらしい一面もありますね。今マスターは刹那さんと真名さんをからかっております。あの二人があんな顔…カシャ保存完了です。先生の寝顔？もう撮ってありますが？」

私はアリサ先生の頭に手を乗せる。

「明日からも頑張ってくださいアリサ先生。」

「んン」

アリサ先生は気持ち良さそうに眠っている。

6時間目「仮契約」（前書き）

めずらしく１００００文字を超えました。

6時間目「仮契約」

ｓｉｄｅ　刹那

現在朝６時。いつもなら起きている時間なのだが今日はいつもと違う。

「この小さい体のどこにこんな力があるのでしょうか？」

寝ている間にこうなったのだろう。アリサ先生が私の胸にうずくまるように抱き着いている。ガッチリと抱き着かれていて動けない。

「アリサ先生起きてください。」

私はアリサ先生を起こそうとするが、

「今までしっかり眠れていなかったのだろうから、もう少し眠らせてやればいいんじゃないか？」

いつの間にか二段ベットの上から降りていた真名がいう。

「そうだな。」

今まで狙われながら旅をしていて戻って来た後も罪悪感で眠れなかったのだろうと思って、今安らかに眠ってるアリサ先生を起こすのをやめた。

「朝食の準備は任せてくれたらいい。」

「頼んだ。」

そういうと真名はキッチンに向かった。

約３０分たった。真名が朝食の準備を終えて戻った来た。

「準備ができたから起こしてくれないか？」

「わかった。アリサ先生起きてください。」

私はアリサ先生の肩を揺らしながら声をかける。

「う・・ん。」

アリサ先生の体がムクリと起き上がる。

「ふぁ？」

アリサ先生が首を傾げている。

「アリサ先生、朝です。起きましょう？（ヤバい可愛いです！！・・・あれ？なんか違うような・・・）」

若干アリサ先生の姿に疑問を感じながら起きるのを促す。

「ふぁい。」

まだ寝ぼけているのか呂律の回らない返事をするとアリサ先生はベットを降りてフラフラとテーブルに向かう。

「アリサ先生、先に顔を洗いに行こうか。」

真名がフラフラしているアリサ先生にそういった。すると先生はコクッと頷くと真名に手を引かれて洗面所に向かった。真名の顔が赤かったのは気のせいかな？

ｓｉｄｅ　真名

フラフラしているアリサ先生を見ていてこれは（物理的と可愛さ的に）危ないと思った。

「アリサ先生、先に顔を洗いに行こうか。」

そういうとアリサ先生は目を擦りながら、コクッと頷いた。

（これもかなりヤバいな／／）

その動作に時めいてしまった。良くわからない衝動が私を襲うがそれを抑えて洗面所に連れていき顔を洗ったアリサ先生にタオルを渡す。

「すっきりしました。」

どうやら眠気が去ったようでいつもの口調に戻っていた。

「あっ、そうだ。」

そういうとアリサ先生は影から何か小さなものを取り出した。

「なんだいそれは？」

「真祖の力を抑えるために作った封印具です。任意で解除可能にして、魔法発動体でもあります。」

「そうする必要なんてあるんですか？」

着替えて来た刹那が聞いて来た。

「まだこの身体に慣れてませんので、今日から少しずつ慣らして行こうかと思いまして。」

そういいながらアリサ先生は取り出したピアスを耳につける。それは星と三日月が連なっているピアスである。両耳につけると今まで膨大だった真祖の魔力が感じられなくなった。

「すごい効果だな、アリサ先生の作った封印具は。」

「世の中にはこれより凄いものなんかたくさんありますよ。」

アリサ先生は苦笑いしながら振り向いた。

「おや？先生右目の色が・・」

「えッ！？あれ、コンタクトが！？」

アリサ先生はもう一度鏡を見ると慌て出した。アリサ先生の右目はサファイアのような青をしている。

「アリサ先生もカラーコンタクトを？」

「ええ、私オッドアイなんですよ。昔そのせいでからかわれて・・・

あれ？おかしいな換えも持って来たはずなのに。」
影から換えのコンタクトをだそうとしているが見つからないらしい。
そんなアリサ先生に声をかける。
「アリサ先生うちのクラスはそんなことで笑わないよ。」
「たしかに大丈夫そうですね。あのクラスなら。よし、このまま行きましょう。」
アリサ先生がそういうと私たちは食卓に向かった。

ｓｉｄｅ　アリサ

「そううういえば私どこで寝てたのでしょうか？」
ふと思ったことを言ってみた。
「えッ？／／覚えてないんですか？」
刹那さんが驚いたように言った。
「私ま朝にかなり弱くてさっき真名さんからタオルを貰ったのは覚えているのですが。」
「そうなんだ。（ということはあの仕草は無意識に／／）」
「…温かかった。」
「えっ？」

寝ている間にに感じた感覚がボソッと口からこぼれた。
「い、いえ／／なんでもありません。」
「そうかい？なら早く食べようか。」
「そうですね。」
そういうと私たちは食事に戻った。

いったん職員室に言って新田先生やしずな先生に挨拶をしてホームルーム前に教室に行くとまたもや罠が仕掛けてあった。解くのもめんどくさいと思ったので教室の後ろから入る。

「後ろから来たでござるか。」
「アイヤー、失敗したアルヨ。」

クラスのみんなは失敗とわかると自分たちの話に戻った。

「今回はあなたたちですか？古　菲さん、楓さん。」
「昨日の動き結構なてだれだと思ったでござるからな。」
「それであんな仕掛ですか。」

教卓の方を見ると昨日より危険なものになっている。

「折り紙で作った手裏剣ですか。その言葉使いといいあなたは忍者ですか？」
「な、何のことでござるか？」

わかりやすい否定の仕方をする忍者。

「ン、アリサ先生右目の色が昨日と違うアルヨ？」

古　菲さんがそういうとクラスのみんなが私の方をみた。

「ほんとだ！」

「なんでなんで？」

「昨日はカラコンをつけていたので。」

「なんでカラコン？」

「それはちょっと…」

「オッドアイっていいな。綺麗だし。」

「そうですか？」

「うん綺麗だよね。そういえば明日菜もオッドアイだよね。」

「逆だけど色もおんなじだし。」

と、かなり好評だった。これなら大丈夫だと確信した。

「うわ！？痛っ！！」

声が聞こえたと思ったらネギが罠に引っ掛かっていた。とたんにクラスが笑いに包まれた。

「アリサ先生、ちょっといい？」

明日菜さんが話かけて来た。

「何でしょう？」

「ここじゃあ話づらいから昼休みに話がしたいんだけど？」

「・・・わかりました。」

明日菜さんが魔法関係について話があると悟り真剣な顔で答えた。

「明日菜、どないしたん？」

木乃香さんが横から話しかけてきたので私は話を変える。

「いえ、明日菜さんが今日の英語で何をやるか聞いてきたので要点を教えようと思ったんですよ。」

私は明日菜さんにアイコンタクトをする。

「ほんまか？勉強嫌いな明日菜が？」

「そ、そうなのよ！！さすがにエスカレーター式でも少しは頑張らないといけないと思ってね。」

美味く合わせてくれる明日菜さん。少し挙動不審だけど合格の枠です。私はさらに一言加える。

「木乃香さんもやりますか？」

「ええの？ほな、お願いしますわアリサ先生。」

そういうと木乃香さんは教科書を取り出した。私は要点を簡潔に二人に教えて行く。そうしていくうちに回りからも2、3人集まって来て要点をまとめる人が出てきた。それは、刹那さん、真名さん、茶々丸さんだった。刹那さんは木乃香さんに見えないように座っている。いつも如く賑やかな朝の教室はそこの一枠だけ静かだった。

「Ｔｈｅ　ｆａｌｌ　ｏｆ～」

ホームルーム後はすぐに英語だったのでそのまま教室にいます。今、ネギ先生（学校内だから）が英文を読んでいる。

「今の所誰かに訳して貰おうかなあ。えーと・・」

そういうとクラスのみんなが当てられたくないようで顔を背ける。

（絶対わざと背けている人がいますね。特にさっきの五人。）

私がそう考えていると、

「じゃあ明日菜さん。」

「なんで私に当てるのよ！？」

（こらこら。）

「まあいいわ。――」

明日菜さんがスラスラと答える。

「なっ・・・あの明日菜が！？」

「スラスラと答えるだと！？」

「そういえばさっきアリサ先生と勉強をしていたような。」

「何！？あの明日菜が勉強だと！？」

クラスのみんなは明日菜さんが答えたことに驚いている。木乃香さん、刹那さん、真名さんは笑いをこらえている。

「アリサ先生の教え方めっちゃわかりやすかったわ。」

木乃香さんがそう言った。

すると視線がかなり集まってきた。

「先生後で私たちにも教えてください。」
「いいですよ。後でこの時期に教える範囲の要点だけまとめたプリントを作っときますね。」
「よろしくねアリサちゃん。」
「明日菜でもああなれるんだから私だって。」
「私も頑張るアルヨ。」
「拙者も。」

こうして、２－Ａの勉強意識が高まるのであった。

ｓｉｄｅ　明日菜

昼休み。私は約束をしたアリサちゃんを職員室前で待っている。

「すみません遅くなって。」
「ううん、こっちこそ。朝、いきなり言ったから予定狂ったでしょう？」
「いえ、予定はなかったので大丈夫ですよ。」

アリサちゃんはそう答える。

ｓｉｄｅ　アリサ

さっき予定はなかったと言ったが、１時間目が終わってすぐ、学園長に呼ばれたのであった。内容は『変な誤解をしてすまなかった。君の覚悟は聞かせて貰った、思うように行動してくれかまわん。後ちょっとでもいいからネギ君の力になってやってくれんか？』という内容だった。兄の力になるかどうかはその時の気分でということにした。

職員室に戻ったら生徒たちとの約束通り要点をまとめたプリントを作っていた。

「とりあえず人掃いの結界をかけますね？」

「あっ、うん。」

屋上に来た私たちは人に聞かれたらまずいと思い結界をかけようと思ったらかからなかった。

「あれ？おかしいですね。」

「どうしたの？」

「結界を張ろうと思ったんですが上手く作動しないんです。」

私は何かに阻害されているのではと思い回りを見るが何もない。不意に明日菜さんの顔が視界に入る。

「あっ！！そうでした。魔法無効化能力（マジックキャンセラー）！！」

「何それ？」

「明日菜さんが持っている能力です。その名のとおり魔法（マジック）を無効化（キャンセル）にする能力です。」

「それって魔法が効かないってことだよね。」

「それだけではありません。自分の魔法効力も無効化します。」

「何それ！？ということは私魔法使えないの？」

「ちょっと待ってください。『陽奈（ひな）の封印５０％解放』」

私そう唱えるともう一度人掃いの魔法を唱えた。
「えっ！それってさっき失敗したんじゃ――」
「今度は大丈夫です。」
私は明日菜さんの言葉を遮り。笑顔を向けた。すると明日菜さんは顔を真っ赤にして止まった。
結界が完成した感覚がした。

「成功です。」
「ほんとだ、さっきまで賑やかだったのに。」
「で、話しとはなんでしょう？」
「えっ？あっ、そうだった。」
そういうと明日菜さんは意志を込めた目をして話してきた。

「昨日の朝に親近感がわくとか言っていたでしょう？」
「まあ、はい。（といっても私には一昨日のような感覚ですが。）」
「その時、肉親を見るような目で私を見ていたよね？」
「そうですか？」
「うん。それに向きは違うけど目の色がおんなじだし、同じ力ってことはアリサちゃんもその魔法無効果能力が使えるってことだよね？それって何か関係あるの？」
明日菜さんは痛いところをついて来る。私は気を引き締めると、
「知りたいですか？」
「もちろん！！」
明日菜さんは身を乗り出して迫って言った。

「知ったら今までの暮らしに戻れなくなるかもしれないとしてもですか？」
「それってどういう――」
「言葉のままです。」
「・・・」

明日菜さんは黙り混んでしまった。

「興味だけでこちらに入るのは良くないぞ神楽坂明日菜。」
「エヴァさん。聞いていたんですか。」

屋上の入り口の上にいたらしくこちらに近づいて来たところに話しかけた。

「ああ、サボっていたらいきなりお前たちが来たからな。」
「それはこちらの注意不足ですね。」
「まあ、それはどうでもいいか。」
「そうですね。」

そういうと私とエヴァさんは話しを区切る。

「「どうします（する）、明日菜さん（神楽坂明日菜）？」」

私たちは声を合わせて明日菜さんに言う。

「わ、私は・・・・・・知りたい。私のことなのに私が知らないなんて嫌よ！自分のことを知りたい！！」
「・・・わかりました。では放課後にそろそろ時間ですから。」

強い意志に私は負けを認めた。

「約束よ！！」

「・・・はい。」

明日菜さんは屋上から降りて教室に向かった。

「すみませんタカミチ先生。私のせいで・・・」

「いいのですよ。遅かれ早かれ知られる運命だったんだ。」

明日菜さんの去った階段からタカミチ先生が言った。私があらかじめ呼んでおいて隠れて貰った。

「で、神楽坂明日菜は何者なのだ？」

エヴァさんが聞いてきた。

「明日菜さんの記憶を戻す時にいいますので。」

「今では駄目なのか？」

「お楽しみということで。」

「なら仕方ないな。」

エヴァさんは今はそれで抑えてくれた。

「アリサちゃん、さっき結界をかけた時に使った魔力って――「ごさっしのとおりです。これも放課後に説明します。」

タカミチ先生の言葉を遮り私は屋上を降りるため階段に向かう。

「あっ、エヴァさん刹那さんの修行に別荘貸してもらっていいですか？さすがにダイオラマ魔法球は持ってませんから。」

階段を降りる前に確認する。ダイオラマ魔法球はかなり高い頑張れば買えなくはないが。

「かまわんぞ。それより早く呪いを解いてくれ。」

「今日にでもやりますよ。」

私はそういうと今度こそ階段を降りて言った。

ｓｉｄｅ　タカミチ

「あの姿といいあの方の血を色濃く受け継いだのですね、アリサちゃんは。」

アリサちゃんが降りて言った後を見ながら僕は呟いた。

「あの方って誰だ？」

「それもアリサちゃんが説明しますよ。」

聞こえたらしく反応したエヴァに僕はそう言った。それは僕が言うべきことじゃあない。

ｓｉｄｅ　アリサ

私は今大量のプリントを持って教室に向かっている。今朝生徒たちに頼まれたものを運んでいるのだ。

「アリサ先生大丈夫？」

いきなり後ろから声をかけられた。止まって後ろを向くと私のクラスの主席番号六番大河内　アキラさんがいた。

「アキラさん、大丈夫ですＹキャ！！」

大丈夫と言ってまた歩きだそうとしたけれど、躓いてこけてしまった。それとともにプリントが散らかってしまった。

ｓｉｄｅ　アキラ

目の前でおもいきりこけたアリサ先生を見て急いで駆け寄った。

「先生、大丈夫！？」

「ううっ、痛いです。」

涙目になっている先生。私は先生との身長が５０ｃｍ近くある。上目遣い＋涙目、さらに可愛いより綺麗な印象が強かったのでそのギャップで効果抜群だった。

「／／アリサ先生拾うの手伝うよ。」

私は顔が熱くなるのを感じつつそう言った。

「お願いします。」
先生は素直に頼んで来た。私は自分でやると言われると思っていたので少し驚いた。
（ちゃんと頼むこともできるんだね。）
そう思いつつ綴じられたプリントの冊子を集めていく。
「あれ、これ英語だけじゃないんだ。」
プリントの中が見えたが回路図みたいなのが見えた。
「ええ、担当の先生に聞いて教科書を見せて貰ったんです。英語の他に、数学と理科をやりました。国語と社会もやろうと思ったのですけれど難しくて間に合いませんでした。」
「いや、短時間でこれだけ作るのもすごいと思うよ？」
（これは一人でできるようなものじゃない。英語だけならまだしも。）
冊子一つに約２０枚、それが理科、英語、数学とあるのだから。
「回りの先生も生徒のためならと図を書くのとか手伝ってくれましたから。」
「そうなんだ。」
アリサ先生はそれだけ回りの先生とも馴染めているということだ。
（こっちに来てまだ二日目なのにすごいな。）

ｓｉｄｅ　アリサ

プリントを集め終えて再び廊下を歩いている。アキラさんに半分プリントを持ってもらっている。なぜあそこにいたか聞くと職員室に用があって行ってきた帰りだったそうだ。

「そういえば昨日ピアスなんてつけてなかったけどなんで今日はつけているの？」

「やっと昨日出来たんですよ。」

「出来たって自分で作ったの！？」

「はい。こういうの作ったりするの得意なんですよ。」

そういうとアキラさんはまじまじとピアスを見た。

「ほんとだ製造社の文字とか入ってない。すごいなあ。」

「よかったら作りましょうか？」

アキラさんが物欲しげに見ていたので聞いてみた。

「えっ、いいの？でも――」

「あっ、そうかアキラさん水泳部でしたね。ピアスは駄目ですね・・・ネックレスでどうですか？」

「本当にいいの？」

「ええ、仕上がりは二、三日後にになります。」

「ありがとうございます、アリサ先生。」

「いえ、可愛くなりたいと思うのは女の子の特権ですからね。それ

と先生じゃなくていいですよ。」

そんなおしゃべりをしていたらいつの間にか教室についていた。

ｓｉｄｅ　明日菜

ホームルームが終わった。私はすぐに教室から出てアリサちゃんを追う。ちなみにアリサちゃんが作ったプリントはみんなに好評だった。とてもわかりやすかった。

「そんなに急がなくても逃げたりしませんよ。」

後ろから声が聞こえた。

「あれ？なんで後ろに？」

「さっき越したのはあなたですが？」

「そうだっけ？」

声の先にはアリサちゃんがいた。私は追い掛けることだけを考えて追い掛ける人を追い越していた。

「はあ、そうですよ。それと私はまだ仕事終わってないので。」

「そうだった。」

「じゃあ６時頃に寮の前で待っていてください。」

「わかった。」

ｓｉｄｅ　アリサ

私は明日菜さんと別れた後、図書館島にいる。

（日本史と世界史・・・後は古文でしたっけ？三年生になったら漢文もでしたね。五教科以外もやった方がいいでしょうか？）

旅で日本にも来たことがあるので日本語は翻訳の魔法がなくても理解でき、地理もある程度はわかるがさすがに文法や歴史は詳しくはない。だから、勉強のしようと思っ参考書を探しに来たのだ。

「届きませんね。いつ人が来るかわからないので魔法は使えませんし。」

そういって回りを見回す。いくつか先にある本棚に梯子が立て掛けてあるのを見つけた。

「駄目ですね。すぐに魔法を頼っちゃ・・」

そういって梯子を取りにいく。ふと一冊の本に目が止まった。

「なんか、気になりますね。」

私はその本をとるとさっきまで参考書を探していた場所に戻り目当ての参考書をとると机の方に向かい、さっきの本を読み始めた。

ｓｉｄｅ　のどか

今日は放課後の後半のカウンター当番だった。今、閉館時間の五時半になったので人が残っていないか見回りをしている。いつもは残っていないのだが今日は違った。

「あっ・・・」

アリサ先生がいた。昨日教室に入ってきた時の凛とした姿を見た後からなぜか気になっていた。ハルナは禁断の恋が始まったと言っていた。（夕映はネギ先生に気を取られていた。）そんな彼女に声をかけようと思ったが、集中して本を読んでいる姿はとても綺麗で見惚れてしまった。

「ん？どうしたんですか、のどかさん？」

こちらに気付いたらしく声をかけてきた。

「ぁ、あの、閉館時間です。」

「もうそんな時間ですか？思いがけず読み耽ってしまいましたね。」

先生はそういうと帰り支度を始めた。

ｓｉｄｅ　アリサ

図書館島からの帰り。私はのどかさんと一緒に寮に向かっている。

「そういえばアリサ先生って図書館に何をしに来ていたんですか？」

のどかさんが聞いてきた。

「日本の歴史とか学ぼうと思いまして参考書を。」

「先生って勉強家ですか？」「そうでもないですよ？結構旅行してましたし。」

「旅行好きですか。」

旅をしていたので旅行で間違いないと思う。

「そういえば先生の作ったプリントすごくわかりやすかったです。みんなもそう言ってました。」

「それはよかったです。」

「でも、大変じゃないですか？英語以外にも作ってましたし。」

「ほかの先生にも手伝って貰いましたし。私はヒントと例題の解説を書いただけですよ。」

たしかに大変だけど生徒のためならと頑張れましたし。

「もしかして参考書を探していたのって・・・」

「ええ、国語と社会のプリントを作るためですが？」

「よ、よかったら手伝わせてくれませんか。」

「えっ？」

私はそのような質問が来るとは思ってなかったのでそんな声が出てしまった。

「て、手伝わせてください。そうすれば一緒に入れるから。」

「まあ、いいですが、最後の方なんていったんです？」

「な、なんでもありません。」

気になったが本人がいいたくない時は無理に聞かない（そうでない時もあるが）。そう思っている内に寮に着いた。

「そうですか、ではまた明日。」
「はい。」

のどかさんと別れた後すぐに明日菜さんが出てきた。

「ちょっと遅かったかな？」
「大丈夫ですよ私も今来たところですから。」

そういい私は影に参考書を入れる。

「さあ、行きましょうか。あまり待たせるといけないので。」
「行くってどこに？待たせる？」
「ついて来ればわかりますよ。」

ｓｉｄｅ　明日菜

アリサちゃんについて来たところはログハウスだった。アリサちゃんがノックをすると扉が開いた。

「お待ちしてましたアリサ先生、明日菜さん。」
「茶々丸さん！！」

出て来たのは同じクラスの茶々丸さんだった。

「ほかの皆さんは？」

「マスター始めすでに別荘に入りました。」

「じゃあ私たちも行きましょうか？」

「はい。」

「えっ？えっ？」

私の前で訳のわからない会話が繰り広げられている。すると、

「ちゃんと説明しますのでとりあえずついて来てください。」

「う、うん。」

そう言われてアリサちゃんについて行くと、ある部屋に着いた。

「この魔法陣に乗ってください。」

訳のわからぬまま魔法陣に乗ると魔法陣が光った。すると目の前に大きな西洋風の城が建っていた。

「あれ？このお城さっき丸いのに入っていたような？」

「そう、その丸いのの中ですよここは。」

私のつぶやきに答えるような声が聞こえた。

「せ、刹那さん！？」

「ダイオラマ魔法球と言ってだな、この中の一日は外での１時間なんだ。」

「真名さんも！？」

クラスメイトがまたいたので驚いた。

「彼女たちは内の魔法生徒なんだよ。彼女たち以外にもいるけどね。」

「た、高畑先生！？」

「大丈夫だよ今の学園はアリサちゃんの味方だよ。」

アリサちゃんが学園に目をつけられていると聞いて警戒したが、高畑先生の言葉を聞いて安心した。

「遅かったではないかアリサ。では呪いを呪いを解いてくれ。」

「その前に明日菜さんの記憶を戻しますよ。多分明日菜さん気を失うと思うのでその間に。」

「「えっ！？」」

刹那さんと私の声がかぶった。後ろを見ると白いワンピースを来て茶々丸さんと並んでいるアリサちゃんがいた。

「気を失うって？」「いきなり今までなかった情報が流れるんですよ？頭が情報を整理しようとして気を失うのは当たり前です。」

「そういうことですか。」

刹那さんが納得した。私も今の説明で理解した。

「では私は食事の準備に取り掛かりますね？」

「よろしくお願いします。」

そういうと茶々丸さんは城の中に入って行った。

「記憶を思い出させる前にして欲しいことがあるのですが？」

「えっ？何？」
「仮契約を・・・」
「仮契約？」
「魂で契約して魔力の供給や念話ができるようになり、アーティファクトというアイテムが得られるものだ。」
私の疑問にはエヴァちゃんが答えた。
「だが、そんなこと必要か？」
エヴァちゃんが聞く。そこでアリサちゃんは、
「保険ですよ。明日菜さんが自分を見失ってしまわないように。」
「自分を見失うって・・」
「それだけ今のこいつには重い過去だと言うことか？」
私は冗談かと思って言おうとしたがエヴァちゃんの言葉にアリサちゃんが神妙に頷いたのを見て言葉を止めた。
「わかったその仮契約するわ。」
私はアリサちゃんが心配をしてくれていることを悟ってその心配を和らげるために決意した。
「といってもやり方を知らないものをいきなりやってと言ってもちょっと抵抗がありますよね？」
「・・・うん。」

ｓｉｄｅ　アリサ

「仮契約の仕方にはいくつか方法があります。もっとも簡単なのは魔法陣の上でのキス。次はお互いの血を混ぜ合わせて魔法陣の上でそれを飲む。他に宝石を使うものや、相手を倒してから行うものがあります。今回は前者の二つのどちらかですよ。」

私は明日菜さんに仮契約の仕方を説明した。

「キスか血を飲むかってこと？」

「ええ。」

明日菜さんはものわかりがよくて助かります。

「（…アリサちゃんなら）キスでいいわ。」

顔を赤くしながら明日菜さんはそういった。

「わかりま「よし、先に私とアリサで見本を見せようか！！」えっ！？」

了解しようとした時にエヴァさんが割り込んで言った。

「あ、あれだ／／神楽坂明日菜がやったことないから実際に見せてやろうと思ってだな／／」

「い、いいんですか？／／」

「良くなかったらこんなこと言わん／／」

私もエヴァさんも顔を真っ赤にしながら喋る。

「あの、先生・・・私も・・その・・・仮契約してくれませんか！？／／／」
「私も／／」
刹那さんと真名さんもそんなことを言ってきた。
「え？えっ？」
私は頭がパニクってきた。
「私に自信をくれた先生に何かお礼したくて・・・よかったら私も従者にしてくれませんか／／」
「私も先生の従者にしてほしい。／／」
二人の理由を聞いている間に頭が落ち着いた。二人の真剣な表情に私も決意した。
「わかりました。」

ｓｉｄｅ　エヴァ

仮契約をすると決まるとアリサは魔力で魔法陣を出した。
「普通チョークとかで地面に書くのだがな。（魔法の射手を撃ってきたときも思ったがホントに魔力のコントロールが上手いな。）」

私は若干呆れ気味に言う。

「こっちの方が展開が早いんですよ。」

「だが魔力を使うだろ？」

「こんなの使った内に入りませんよ。あっ、魔力量の多い方がマスターになるように設定してますので。」

私は大きな魔法を主に使うからこの細かい作業だと必要以上に使うと思った。

「じゃあいくぞ。」

「はい。」

私はアリサを抱き寄せ唇を重ねる。すると魔法陣が輝き縦横比１６：９のカードが現れる。

「契約成功だな。私はお前を縛り付けたりはしないからな。」

（この娘はどうあがいてもどこかに飛んで行ってしまう気がする。だったら飛び立つまで私のもとで羽を休めればいい。いや、出来たら私も一緒に飛び立とうじゃないか。）

そんな私の心を読んだのか、

「ありがとうございますエヴァさん。そしてよろしくお願いします。」

アリサは満面の笑みを浮かべて言ってきた。

「ああ、よろしくな。」

私も笑みを浮かべて帰した。

ｓｉｄｅ　明日菜

（今度は私の番か）

「ここからは私がマスターですね。」

「そうだね。明日菜はアリサ先生より魔力量少ないし私たちはアリサ先生の従者になることを望んだからな。」

アリサちゃんに反応するように真名さんが答えた。

「私、アリサちゃんの心配がなくなるように頑張るから。」

「その調子なら心配いらないですね。」

「じゃあいくよ。」

「はい。」

私はアリサちゃんを抱き上げる。

「うわっ、何！？」

「こうすればキスしやすいかなって／／」

そういいながら私はアリサちゃんと唇を重ねる。

（んっ？さっきの光と少し違うような。）

私は微妙に違う輝き方に疑問を持ったが気のせいと思いそのままに

した。

ｓｉｄｅ　刹那

私は今さら女の子同士のキスについて疑問を持ったが、もうすると決めてしまったことなのでそんな考えを捨てて先生を抱き上げた。

「この感覚、昨日一緒に寝てくれたのは刹那さん立ったんですね。」

「い、嫌でしたか。」

私はアリサ先生に聞いた。

「いえ、とても温かかったです。まるで真っ白な羽に包まれているみたいでした。」

「ちょっと待ってください。」

私はそういうと翼を広げた。

「刹那さんあの時の烏族だったのですか。」

「あの時？」

「私、実は一度刹那さんと手合わせしているんですよ？」

「えっ！？」

「四年前、旅に出てすぐに日本に来て詠春さんのところに会いに行って日本の剣術の基礎を学んだのですよ。」

「えっ、でも。」

私は覚えがない。金髪で緑と青のオッドアイでこんなに目立つのに。

「あの時は魔法で髪を黒く染めてカラーコンタクトも黒にしていましたから気がつかなくても無理ないですよ。あの家にいたのも一週間くらいでしたし。手合わせしたのも出立する日でしたしね。」

そう言われた時私は思い出した。四年前ある少女と手合わせしてこてんぱんに負けた。自分より年下の少女に翼まで出して負けた。その少女は強い覚悟を持っていた。そして、その少女が私に残した言葉をバネにして頑張っていたことを。

「『護る覚悟のある者は強い。でも、自分すら護れない者は誰かを護ることなんてできない。自分を犠牲にするのは本当に最終手段です。』でしたっけ。あの時アリサ先生の言葉は。」

「はい。思い出していただけましたか？」

「私はその言葉を守ってるつもりでした。でも、結局私は自分も木乃香お嬢様も犠牲にしていた。」

「まずは自分を知ることからですね。自分がどうしたいか、どうありたいか。」

「今度こそあの言葉を守れることを誓います。この仮契約はその契りです。」

私そういうとアリサ先生を翼で包むように折り

「これからはあなたも護ります。」

と、いうとアリサ先生と唇を重ねた。

ｓｉｄｅ　アリサ

（やはりどこか違うような。）
明日菜さんと仮契約した時の変化にも気がついていた。
（エヴァさんと仮契約した時と精霊たちの舞い方が違う。）
そう思ったとき仮契約が完了した。
明日菜さん同様コピーカードを刹那さんに渡した。

ｓｉｄｅ　真名

なんか仮契約の時の魔法陣の輝き方が変だが別に失敗はしていないので関係ない。
「アリサ先生は私に興味を持たせてくれた。私はあなたのことをたくさん知りたい。そしてあなたについていくよ。」
「その覚悟、しかと受け止めました。」
アリサ先生がそういうと私は彼女に唇を重ねる。
（これは！！）
その時私の魔眼に映った者に驚いた。どうやらアリサ先生も気づいたらしい。

ｓｉｄｅ　アリサ

（ようやく解りました。でも・・・）

「皆さん、仮契約する時少し輝き方が違うのに気づきました？」

私は真名さんにコピーカードを渡してから話し始める。

「ああ。」

「うん。」

「はい。」

「もちろん。」

みんな気づいてたようだ。

「実は精霊たちが私の力に干渉して仮契約だけど本契約のような状況になってしまいました。」

「「「はい？」」」

真名さん以外そんな返事が帰ってきた。

「私がマスターになった方が特に、魂が強く結びついて破棄不能そして私と同じ不老不死になっちゃったみたいです。」

「「本当に！？」」

「すみません。私の所詮で。」

「不老不死ってことはずっと一緒ってことだよね。」

「えっ！？」

「アリサ先生と別れる人が減ったということだよね。」

「ということは私がアリサ先生の支えになれるということですね。」

何と言うポジティブ思考と私の頭に過ぎった。

「本人たちがいいならいっか。」

「そうだな。というかアリサ、敬語使わなくても話せるじゃないか。」

「これからは、ここにいる人達になるべく敬語を使わず話せるようにしようかと。」

「その方がいいだろうな。」

6時間目「仮契約」（後書き）

アーティファクトと能力どうしましょう？明日菜はハマノツルギで決定ですがアリサ、刹那、真名のアーティファクトが・・・自分でも考えますが何か案があったら感想にお願いします。

7時間目「解呪」（前書き）

アリサのアーティファクトはこちらで決めたので、刹那と真名のアーティファクトの案があったら9月6日の23時59分まで受付ますのでどうかご意見よろしくお願いします。

7時間目「解呪」

side　アリサ

「では、行きますよ。」

「う、うん。」

私は明日菜さんの記憶を戻すため普通のより特殊な術式を組んだ魔法陣に明日菜さんを誘導する。

「それよりアーティファクトの確認をしなくていいのか？」

エヴァさんが尋ねてきた。

「そっちはいつでもできるので今、やらなければいけないことをやろうかと。エヴァさんの方もですから。」

「そうか・・・そうだな。」

エヴァさんは思い出したように笑った。

「では・・」

私がそう言うとエヴァさんが少し後ろに下がり、明日菜さんからは唾を飲む音がした。

「スピリット・ソウル・マイ・ピース　闇よ光よ混じり合いて彼の者を戒めし力を解き放て　【暁の目覚め】」

私が詠唱すると魔法陣の回りから濁った光が現れ、明日菜さんを包み込む。すると、いきなり輝き出す。その輝きが収まるとともに明日菜さんの体が傾きだす。

「【魔法の射手　戒めの風矢】」

私は戒めの風矢で傾いた体を支えた後明日菜さんに近づく。明日菜さんからは規則正しい寝息が聞こえた。

「終わりましたか？」

刹那さんも明日菜さんの様子を見に来たのか近づいて来た。

「ええ、しばらく目を覚まさないと思うので、明日菜さんを寝床に連れて行ってくれませんか？」

私では身長差で運ぶのは無理。魔法で連れて行ってもいいが明日菜さんとなると時間と魔力がかかる。今、戒めの風矢でもかなり魔力を使っている。だから刹那さんに頼んだ。

「わかりました。」

刹那さんがそう答えると私は戒めの風矢を解いた。すると刹那さんは少し慌てながら明日菜さんを抱えた。いわゆる、お姫様抱っこである。

「では、お願いします。」

「はい。アリサ先生。」

刹那さんが城に入って行くのを確認すると少し息を吐く。

「さっきのは光と闇の合成解呪魔法かい？」
真名さんが隣に来て聞いてきた。
「ええ、どちらかだけにすると偏って思い出しますからね。すべてを思い出すにはやはり光と闇を混ぜ合わせなければいけません。」
「そうだな。神楽坂明日菜がそれも覚悟していたかはわからんがな。」
エヴァさんも納得して言った。
「さて次は私の番だ。頼むぞ。」
「ええ、まずは術式を見るので準備ができるまで待っていてください。」

side　エヴァ

アリサは待てと言って目を閉じた。
「月詠　【解除】」
そう唱えるとアリサから感じる魔力の質が変わった。
「声に反応する封印術式か・・・お前から真祖の力を感じなかったのはそれのせいか。」
「はい、少し慣れないのでこれなら切り替えができるので。」

「そうか、手加減はたしかに面倒な練習だからな。」
真祖になると魔力が上がるだけでなく筋力も上がる。私はアリサの言葉に昔を思い出しながら頷いた。
「コントロールは得意分野なのですぐ慣れると思います。今日は１０％くらいで過ごしてました。」
アリサは話しながらも、魔法式をだすために魔力を練る。
「そうか。そういえば一つ言い忘れていたが私の魔力は登校地獄ではないもので封印されていると言うことが最近になってわかった。」
登校地獄はただ端に登校させるための呪い。魔力を封じる力はない。
「というと？」
「学園結界だ。茶々丸のおかげでわかったんだが最近の魔法使いは電気に頼っているらしくてな、そこまで気が回らなかった。」
「ということは一回学園結界を解かないとその封印は解けませんね。」
アリサは理解力があって助かる。説明が簡単でいい。それに口を動かしていても体の動きが止まらない。今は魔力で魔法陣を構築している。
「大丈夫だ。その目星はついている。その時ついでに坊やの実力を見ようと思う。」
「なら安心ですね。それと、甘やかされて育ったんで期待しないほうがいいですよ。っと、準備できました。」

いつの間にか魔法陣が完成していた。私は言われずとも魔法陣の中に入った。すると登校地獄の術式が浮かんだ。

「うわあ・・・かなりいい加減な上に複雑な術式ですね・・・」

「ホントにな・・・」

半ば呆れて会話する。本当にかなりいい加減である。

ｓｉｄｅ　アリサ

「これをかけたのが自分の親だと言うのがかなり残念です。」

「先生、同情します。」

いつの間にか戻って来ていた刹那さんが肩に手を置いて言った。

「私は魔法のことはわかりませんがこの術式がかなり雑だと言うのはよくわかります。」

「流石はナギさん・・・といえばいいかな？」

素人でも解るほど雑なのだ。タカミチ先生はもうどう表現したらいいのかわからないようだ。

「雑すぎて逆に解きづらいですよ。」

「見た目は雑だがしっかり組まれているからね。これは難しいよ。」

私の声に真名さんが反応した。

「解くのが難しいのなら、打ち消します。」
「「打ち消す？」」
「ええ、理論上かかっている呪いの全く逆の効果の呪いを同じ魔力量でかければ打ち消すことができます。」
「だから解放したのか？」
「ええ、多分こうなると予想できましたから。」

私は溜め息をつく。予想が的中したことと、自分の父親が本当にアホだと言うのがわかったことで。

「先生、元気出してください。」

そこへ茶々丸さんが来た。きっと食事の準備が終わり、主人の呪いが解けるのを見に来たのだろう。

「ありがとう、茶々丸さん。はあ、もうなんか疲れました。もう、名前・・登校拒否でいいや。」
（（（何と言う投げやりな！？））））

アリサの言葉に回りは心の中でつっこむ。だが、エヴァは、

（なんか、懐かしいな。）

と、ナギの姿と重ねていた。
封印の術式はかなり雑になっている。そして完成に近づくくと・・・

ピシッ
ピシシシシ、パキン！！
空気の割れるような音が聞こえた。

「これで打ち消されたはずです。どうですか？」
「ああ、枷が取れたような気分だ。」
「ということはマスター封印の一つは解けたのですね。」
「後は学園結界だけだ。頼んだぞ茶々丸。」
「はい。」

茶々丸さんは嬉しそうな顔をして返事した。

「茶々丸さん、いい笑顔ですね。」
「えっ！？」
「気づいてなかったのですか？さっきのは嬉しそうでとてもいい笑顔でしたよ。」
「これが、嬉しいという感情ですか。」

茶々丸さんは手を胸の前で組んで目を閉じながらそう言った。そして、また嬉しそうに笑った。それをエヴァさんは子を見守る親のような顔で穏やかに微笑んでいた。

7時間目「解呪」（後書き）

ワルツ「出番がないニャ・・・ということでここはしばらくおいらが仕切るニャ。次回は多分、おそらく、きっと明日菜の記憶に関してニャ。」
アリサ「ワルツ・・・何と言う曖昧な表現ですね。」
ワルツ「だって作者がハッキリしてNミャ！！」
アリサ「ワルツ・・・その先を言ったらもっと出番がなくなる可能大ですよ？」
ワルツ「そ、それは困るニャ！！」
アリサ「という訳でそろそろお時間です。」
ワルツ「話しが繋がってないニャ！！」
アリサ「それでは皆さん。」
ワルツ「無視かニャ！！」
アリサ「次回お楽しみにー」
ワルツ「ああ、おいらの出番が・・・」

8時間目「過去」（前書き）

事前申告
最後の方かなりグダグダです。無理矢理繋いだようなものになりました。

8時間目「過去」

side　明日菜

――俺達、紅き翼は最強だ！――――嬢ちゃん名前は？――――――アスナか良い名前だな――――待ってなアスナ全部終わらせてやるからな――――楽しいかいアスナちゃん？――――おいタカミチ越されてるぞ？――――

次々と流れる明るい記憶。それとともに、

――――何百人の命を奪ってきた化け物め――――すまぬなアスナ――――師匠！！――――煙草をくれタカミチ――――嬢ちゃん幸せに生きるんだ。君にはその権利がある――――

暗い記憶。自分がたくさんの人を殺めてきた事実が私を押し潰そうとする。

「わた・・しは・・・」

起きてからかれこれ（別荘内で）一日こうしている。食事は茶々丸さんが持って来てくれた。でも、食欲で湧かずほとんど残していた。

「やはりこうなっていましたか。」

「・・・・アリサちゃん。」

ｓｉｄｅ　アリサ

エヴァさんの封印を解いた後、慣れない真祖の力をいきなり１００％で使ったせいか、立ちくらみを起こしてしまった。だからエヴァさんがかなかな明日菜さんのところに行かせて貰えなかった。そしてここに来たら案の定こうなっていた。

「どうですか、記憶を思い出して？」

「・・・正直こんななんて。」

いつもの明るさがなく萎れている。

「あなたが望んだことですよ？」

「うん、それはわかってるわ。だけど、これからどうしたらいいかわかんなくなっちゃった。」

明日菜さんはハハッと笑い声をあげた。

「明日菜さんは明日菜さんらしく今までのままでいいんじゃないですか？」

「私らしく・・・・か。」

「それでも躓いたなら私も力になりますよ？姉様？」

「「「あ、姉様って（だと）（どういうことですか）！？」」」

ｓｉｄｅ　エヴァ

気になってアリサの後をついて（付けて）来た。ほかの連中もついて来たが気にしない。そして、さっきの姉様発言で私と刹那が飛び出してしまった。

「私と明日菜さんって血が繋がっているんですよ。ね―タカミチさん。」

「えっ！？」

「本当かタカミチ！？」

アリサがそういうと私はタカミチに声をかけた。刹那はキョトンとしている。

「まあ、たしかに血は繋がっているね。明日菜君もアリサちゃんの容姿を見たら解ると思うよ？」

「えっ？・・・あっ、そういえばかなり似てる！！」

タカミチと神楽坂明日菜がこういうと言うことはほんとなのだろう。

（血が繋がっているなんて、なんと羨まし――ん？てことは？）

不意に桜咲刹那と龍宮真名と目があった。こいつらも同じ事を考えているらしい。

「「「アリサ（（先生））と坊や（（ネギ先生））は魔法無効化能力を使えるのか（のですか）（のかい）？」」」

ｓｉｄｅ　真名

明日菜とアリサ先生が血族だと言うことはわかった。ということは必然的にネギ先生も血族だと言うことは解る。魔法無効化能力はウエスペルタティアの王家の魔力と聞いたことがある。

「私は使えます。ネギはおそらく使えないと思います。」

私たちの質問に簡潔に答えてくれた。

「そうか、それで・・・・なんで姉様なのか教えてくれるかい？」

「タカミチさんに母様と明日菜さんは姉妹のような関係だったと聞いて本当は叔母様何ですが年が近いし、それに・・・」

「「「「それに？」」」」

アリサ先生の声はだんだんと小さくなっていった。

「寂しかったから・・・（ボソッ）」

ｓｉｄｅ　アリサ

恥ずかしい！！恥ずかし過ぎる。私は馬鹿にされるかと思い目を閉じた。だが、そんなことは起こらなかった。

「アリサ・・・・一人ぼっちだったんだね。」

「えっ？」

起こったことは明日菜さんが私を抱き寄せ、エヴァさんが頭を撫で

てくれた。刹那さんと真名さん、茶々丸さんは温かな眼差しで見てくれた。

「面倒を見てくれる人はいたかもしれんがなそいつの心は坊やに行っていたのだろう？昨日からわかっていたがなかなかタイミングが掴めなかったからな。」

「マスターはそういうのは不器用ですからね。」

「茶々丸そういう余計なこというな！！」

エヴァさんは茶々丸さんに言い返すが私の頭から手を離さなかった。

「アリサ先生もっと甘えていいんですよ。」

「そうだ、今までの甘えれなかった分私たちに甘えればいい。」

刹那さん、真名さんが言う。目に熱いものが貯まって来る。

――アリサなら大丈夫――――――アリサはともかくネギは――

昔からそう言われてきた。ひと時、兄と一緒うに馬鹿をやって見た。その時も私より兄の方が優先された。失望した『私のことなんてどうでもいいんだ。』そう思うようになった。それから私は感情をあまり外に出さないようにした。麻帆良に来て初めてあった私を心配してくれた人がいた。だから勇気を出してみた。

「寂しかったんでしょう？だったら今、泣いていいのよ？」

抱きしめる力が強くなる。ついに涙が溢れてきた。

しばらく泣いていた。それが恥ずかしく思い赤くなって縮こまってしまった。

「これからは私たちが側にいますよ。」
「私たちは先生の仲間だ。」
「何だったら私たちも姉と呼んでいいぞ？」
「マスターは実は呼んで欲しいらしいです。」

そんな言葉が掛けられる。

「はい。でも、なかなか呼び慣れないと思うので。」
「そうか。」

茶々丸さんに反応していたエヴァさんは少し残念そうに答えた。

「そろそろ戻んなきゃね。外ではもう8時だよ。」

明日菜さんがそういう。

「そうですね。警備の方もありますし。」
「そうだな。」

そうして魔法球から出るとエヴァさんに挨拶して寮に向かう。

「そうだ、アリサ先生が来てすぐだから一週間くらい出なくていいって言われてたんでした。」
「だったら、もう少しいてもよかったな。」
「そうですね。」

そんなこともありつつ夜は更けて行く。

8時間目「過去」（後書き）

ワルツ「作者から一言あるニャ。『こんなグダグダな文を読んでくれてありがとうございます。』だそうだニャ。なんだ、本人も――
「ワルツそれ以上は禁句ですよ。」
ワルツ「そうだったニャ」
アリサ「本編ですら出番が少ないんだから。」
ワルツ「作者様大変失礼いたしましたニャ。」

休み時間「アーティファクト」（前書き）

アーティファクトの紹介です。ご意見くださった方々誠にありがとうございました。

休み時間「アーティファクト」

主　ATHANASIA　ECATERINA　MACDOVEL
L　EVANGELINA
名前表記　ARISA　SPRINGFIELDES
称号　SPIRIT　BELOVED　DAUGHTER（精霊たちの愛娘）
色調　Prism（虹）
徳性　caritas（愛）
方位　centrum（中央）
星辰性　fax（流星）
アーティファクト　無限の絆

主　ARISA　SPRINGFIELDES
名前表記　CAGURAZACA　ASUNA
称号　BELLATRIX　SAUCIATA（傷付いた戦士）
色調　Rubor（赤）
徳性　audacia（勇気）
方位　oriens（東）
星辰性　Mars（火星）
アーティファクト　ハマノツルギ

主　ARISA　SPRINGFIELDES
名前表記　SACURAZACI　SETUNA
称号　GLADIARIA　ALATA（翼ある剣士）
色調　Nigror（黒）
徳性　justitia（正義）
方位　septentrio（北）
星辰性　Sol（太陽）

アーティファクト　無銘の剣

主　ＡＲＩＳＡ　ＳＰＲＩＮＧＦＩＥＬＤＥＳ
名前表記　ＡＲＣＡＮＡ　ＭＡＮＡ
称号　ＤＥＶＩＬ　ＥＹＥ　ＳＮＩＰＥＲ（魔眼を持つ狙撃手）
色調　ｎｉｇｒｏｒ（黒）
徳性　ｔｅｍｐｅｒａｎｔｉａ（節制）
方位　ｏｒｉｅｎｓ（東）
星辰性　Ｌｕｎａ　（月）
アーティファクト　無限の銃庫

アーティファクトの能力
・無限の絆
…形状はマント。どんな契約でも結んでいる相手ならどこにいても念話・召喚ができるようになる。また仮契約カードを収納するスペースもあり従者のアーティファクトも使える。さらに、マントから無限に糸が出てくる。浮遊術を使う時その糸に少しでも触れていると使用者の意思で一緒に飛ぶことができる（逆もあり）。武器としても使える。
・ハマノツルギ
…原作と同じ。追加能力でアリサと契約している精霊の力なら纏えるようになった。
・無銘の剣
…銘刀の名をいえばその刀に変わり、頭で想像した刀にも変化する（双剣もあり）。これも、アリサと契約している精霊の力を纏える。
・無限の銃庫
…どんな型の銃も出てくる。球は使用者の魔力から形成される。これにアリサと契約している精霊を混ぜ合わせて撃つことができる。

休み時間「アーティファクト」（後書き）

真名「これで銃を持ち歩く必要が無くなったな。」
アリサ「ということは銃弾いらなくなったのでは。」
真名「そうでも無いようだよ。普通の銃弾も入れれるようだ。」
アリサ「そうですか。なら無駄になりませんね。」ドサッ！！
真名「こんなに・・・どこで作ったのやら。」
アリサ「前もいったとおり企業秘密です。」
刹那「アリサ先生！！これ、夕凪にもなりました。」
明日菜「この剣でかいわね。」アリサ「これからは、三人で剣の特訓ですね。その方に私は糸を使った戦法も。」
エヴァ「それだったら私が教えてやろう。」
アリサ「ほんとですかだったらよろしくお願いします。」
茶々丸「・・・仮契約ですか。」

9時間目「図書館島」（前書き）

投稿完了！！

9時間目「図書館島」

ｓｉｄｅ　―――

アリサが麻帆良に来て数週間。アリサは着々と回りの一般職員と信頼関係を作っていた。魔法先生とも信頼関係を作っているが中にはエヴァとともに行動をしているのをよく思わない人もいた。エヴァの呪いを解いたことも問題になったが学園長とタカミチが収めた。最近兄との中も良好になってきた。そもそも長年話をしていなかったから話さなかっただけだが最近は教職で話すようにもなってきた。クラスのみんなとも馴染んできた。時々のどかに本を紹介されたり、刹那と剣の修業をしたり、明日菜と魔法無効化能力の鍛練をしたり、茶々丸と料理の創作をしたり、木乃香と麻帆良を散策して着せ替え人形にされたり、アキラと対策プリント作ったり、ネギが馬鹿やったり・・・ａｔｅ

そして今、ネギと学園長に呼ばれて学園長室にいる。

ｓｉｄｅ　アリサ

「・・・はっ？」

私は今学園長に呼ばれてネギと一緒に学園長室に来ていた。

「じゃから、ネギ君とアリサ君には立派な魔法使いとしてのの試練を受けて貰う。」

何言っているのだろうこの老いぼれは？そもそもアリサには立派な魔法使いになる気なんてさらさらない。それにこの老いぼれをいまだに信用できない。

「で、その内容はなんですか？」

だが形だけでもやっておこうと思い内容を聞く。

「それはじゃな、２－Ａを期末試験で最下位から脱出させて欲しいのじゃ。そしたらちゃんとした教員免許も渡そう。」

「「えっ！？そんなことでいいのですか？」」

「ほっ！？」

学園長はネギはそう言うだろうと思っていたが、アリサまでそう言うとは思っていなかったようだ。

「そんなに簡単ではないと思うがの？もし試験に落ちたらウェールズに戻って貰うのだぞ？」

「「わかりました。その試験受けます。」」

そう言うと私たちは、学園長室から出た。

ｓｉｄｅ　ネギ

学園長からだされた課題は案外簡単そうだった。

「アリサ、昨日遅くまで残って試験対策のプリントを作っておいてよかったね。備えあれば憂いなしだね。」
「そうですね。」
そう、アリサがやり始めたのだが気になった僕が聞いたところ流石に最下位のままはかわいそうだと思って作っていたらしい。それに僕も賛同して手伝っていた。まさかそれが課題になると思わなかった。アリサとはまだちょっとギクシャクすることがあるけど、頑張って普通の兄妹みたいな中になろう。
「魔法のことは伏せて試験のことを皆さんに話しますので。」
「えっ！？」
「その方皆さん燃えますから。」
アリサの言葉を聞いて確かにと思った。

side　明日菜

記憶を思い出してから勉強もはかどるようになった。私が勉強できるようになってからクラスの勉強意識が変わっていた。相変わらず賑やかで授業中も騒いだりするが、アリサちゃんが作ったプリントだけはちゃんとやるようになっていた。これ、かなりわかりやすい。この前古　菲のプリントは中国語で書いてあるのを知った。よく見るとみんなに手書きでアドバイスを書いていたらしい。このプリントは月曜に渡されるので土曜に学校に行っている理由がわかった。
（手伝ってくれる人がいるから大丈夫って行っていたけど、今度私

も手伝いに行こうかな？）

木乃香と喋りながらそんな考えをしていたらアリサちゃんとネギが教室に入って来た。私はぶっちゃけアリサちゃんが担任のほうがいいと思う。ネギはすぐ馬鹿をやらかすから。

「今日は皆さんにお知らせがあります。」

いつもならネギが連絡事項を喋るのにアリサちゃんが話し出した。いつもならほとんど聞き流しているけど今日は何やら重大なことのようだ。

ｓｉｄｅ　エヴァ

「今朝、教育実習生としての試験を受けました。その内容は・・・皆さんを学年最下位から脱出学年最下位から脱出させることです。」

すらすらと用件を述べたアリサの言葉でこの教室の空気が凍りついたような音がした。

「あ、あの、先生。ち、ちなみにその試験落ちるとどうなるんですか？」

宮崎のどかか最近アリサ関係のことだとこのクラスの中でも声をあげれるようになって来たな。

「もし試験に落ちたら私もネギ先生も皆さんとお別れしてウェール

ズに帰らなければいけないそうです。」
『ええーーーっ！？』

クラスの連中が声をあげた。うるさいことこの上ない。

（これはジジイのあれだな。これから楽しくなると言うのに・・・ちょっと待てよここで言うと言うことは何か策があるのか？）

私は無理難題だと思ったがアリサの顔は自信に満ちていた。

「これは学園長が出した試験です。」

アリサがその名詞を出すと学園長の悪口がどこからともなく聞こえてきた。

「そこで！！皆さんの今までの成果を学園長に見せて愕然とさせてやりましょう！！」
『オォーーーッ！！』

クラスの連中が揃って声を上げる。

（ククククッ、そう言う魂胆かしかも遠見で見れないようにしてるとは。おもしろそうだから私もその作戦にのろう。）

《茶々丸、今回は手抜き不要だ。》
《了解しました。マスターもアリサ先生がいなくなって欲しくないのですね？》
《『も』とはなんだ、私は唯つまらなくなるのが嫌なだけだ。》
《ですが、アリサ先生がウェールズに帰らなければいけないといった時に真っ先に反応したのは・・・ブツ》

茶々丸がまた厄介なことを行っていたきそうなので念話を切った。

ｓｉｄｅ　―――

二、三日後の夜大浴場で馬鹿レンジャーと呼ばれていた面子＋木乃香、のどか、ハルナが話し合っていた。

「私達、アリサちゃんが作ってくれたプリントのおかげで前よりは勉強できるようになったわよね。」

「案外出来るかもしれへんよ？」

「自信でないでござるよ。」

「でも、ネギ君とアリサちゃんと別れたくないよー！！」

「――ここはやはり・・・あれを探すしかないかもです・・・」

何かよくわからない飲み物を飲みながら綾瀬夕映がいった。

「あれって何アルカ？」

「それは――

ｓｉｄｅ　アリサ

午後９時。

「・・・・眠い（ボソッ）。」最近遅くまで起きていたアリサは寮

の部屋でそうつぶやく。でも寝てない理由は、

コンコン。

さっきからなっているドアを叩く音。真名さんと刹那さんは夜の警備に行っている。警備が休みの時はどちらかと一緒に寝たりもしている。ていうか普段起きたら違う布団にいることが多々ある。そんなこと今は関係ない、居留守を使おうと思ったが相手もなかなかしぶとい。結局折れてパジャマのままおぼつかない足取りで玄関に向かう。

「ふぁ～あ。どちら様ですか。」

そういいながらドアを開ける。

「夜遅くゴメン、アリサちゃん！！」

「明日菜さんですか、どうしたの？」

ドアを開けると明日菜さんと木乃香さんそれになぜか兄がいた。

「ちょっと耳貸して。夕映や木乃香たちが図書館島に行くことになったの、それで心配だから私もついて行くことになったんだけど、私だけじゃちょっときついと思ってアリサちゃんに手伝って欲しいんだけど。」

「んー？べつに構いませんけど？今日中に戻って来れそう？（多分、学園長の仕業でしょうね。木乃香さんの護衛の件、刹那さんの変わりに受けますか。）」

おぼつかない頭の中で考えた私。多分、学園長が途中で絡んで来ると直感で感じたのでついて行こう。

「うーん、一日じゃあ無理かな？」
「じゃあ、行く人から髪を一本貰って。分身を作るので。」
学校を休んだことにしないためにそういった。あのジジイに借りなんて作りたくないですから。そう考えている間に頭が冴えてきた。
でも眠い。
「大丈夫！さっきお風呂で取っといたから。」
「ふぁ～あ。準備いいね。ちょっと待っててね。」
そういうと私は奥に戻り分身を作って各部屋に送る。髪を必要としたのは、その人の個性をちゃんと出すため。
「【来れ（アデアット）】」
私はこのままじゃあ寒いと思ったので、アーティファクトのマントを羽織り自分の分身を作った上で玄関に向かうやはりその足取りはおぼつかない。

ｓｉｄｅ　明日菜

（やっぱり学園長が絡んでたのね。）
じゃないとアリサちゃんがそんな簡単に了承するわけがない。
「ところでなんで兄がいるんですか？」
アーティファクト・無限の絆を羽織ったアリサちゃんが再び出てきた。おそらく分身を作っていたのだろう。

「それはやな、まき絵がぎょうさんいたほうが楽しい言うたさかい。」
「そうですか・・・では行きましょう。」
木乃香の返答に反応するとアリサちゃんはおぼつかない足取りで歩き出した。

side　木乃香

（あれは、危ないわ。）
アリサちゃんの足取りを見てうちはそう思った。
「アリサちゃん、大丈夫!?」
明日菜もそう思ったらしくアリサちゃんに声をかけた。
「大丈夫ですよ。」
アリサちゃんはおぼつかない足取りのまま答えた。どこからどうみても大丈夫そうじゃない。
「仕方ないわね。」
明日菜はそう言うと眠そうなネギ君を抱えてアリサちゃんの前に行くと、

「ほら、来なさい。どうせ最近ろくに寝てないんでしょ？」
明日菜はアリサちゃんの前で屈み背中を指しながらいいおった。アリサちゃんはそれに素直に従いコクッと頷くと明日菜の背負ってもらう。うちが明日菜のところまで行くとアリサちゃんはもう寝てたわ。
「可愛いなー、アリサちゃんの寝顔は。」
明日菜の背中でスヤスヤ寝とるアリサちゃんを見ながらうちは言う。
「そうね、なんで私たちの方に来なかったんだろ。」
「せっちゃんはいつもこんな寝顔見とるんやな。うらやましいわ。」
「せっちゃんって刹那ちゃんのこと？」
「そやよ。」

side　明日菜

私が刹那ちゃんの名前を出すと木乃香の表情が沈んだ。私は木乃香を元気づけるために言う。
「この前ね、刹那ちゃんと話したとき刹那ちゃん悩んでたんだよ。」
「せっちゃんが？」
「うん、木乃香のことでね。昔の関係に戻りたいって行ってたけど何かが突っ掛かるらしいの。木乃香は昔の関係に戻りたい？」
「もちろんや！！」

「じゃあ、刹那ちゃんを信じて待っていてあげて。後は刹那ちゃん言い出せるきっかけさえあれば話すと思うわ。」

そういうと木乃香は、

「わかった。ありがとな明日菜。はっきし言ってうち、せっちゃんとのこと諦めてかけてたわ。でも今のを聞いて自信ついた。」

「そっか、よかった。」

そういい私たちは歩き出した。

ｓｉｄｅ　木乃香

「それにしても以外やわー。子供嫌いな明日菜がアリサちゃんと姉妹みたいに仲がええのは。」

図書館島に向かう途中、さっきの光景を思い出して明日菜に言った。

「アリサはそこらのガキとは別格よ。礼儀もいいし。」

「そやね、ホンマにできた子やよな。料理も出来るし裁縫も出来るし。将来いいお嫁さんになるやろな。」

何回か一緒にお菓子作ったりしたけどホンマ、手際ええし。ちょっと悔しいわ。

「お嫁さん・・・・か。」

よう聞こえんかったけど明日菜が何か呟いて遠くを見つめていた。

「明日菜、どした？」

「えっ！？いや、なんにも！！」
明日菜がそういったので気にしないことにした。
「・・・ん？」
明日菜の背中から声が聞こえてきた。
「明日菜がおっきな声出すからアリサちゃん起きてしまったえ？」
「えっ、ごめん。」
「んー？」
明日菜が誤っとるがアリサちゃんはわけがわからないような声を出した。
「明日菜、図書館島までもう少しあるさかいかわろか？」
「いいの？流石に私も二人は辛いと思ってたとこなの。アリサ、悪いけど木乃香の方に行ってくれる？」
「うん。」
アリサちゃんは明日菜の背中から降りてうちの方に来るそしてアリサちゃんをうちがおぶる。それにしても素直なアリサちゃん可愛ええな。授業の時は凛として綺麗やしギャップがたまらんわ。

ｓｉｄｅ　アリサ

目が覚めたら図書館島の中にいました。そして今は本棚の上を歩い

ている。私はネギ先生に小声で話しかける。

「ん？ネギ先生魔力を感じませんが？（ボソボソ）」

「テストまで封印することにしたんだ。それとここで先生付けはやめない？（ボソボソ）」

「癖になったみたいです。それとどうせ自信を持たせる魔法を使おうとして明日菜さんに止められたのでしょう？」

「ギクッ！なんでそれを？」

「あなたの考えそうなことです。ですが、生徒自信がちゃんとした自信を持たないと意味ないです。魔法で作ったまがい物の感情なんて。」

「・・・ごめんなさい。」

私の言葉にネギ先生は誤ってきた。

「ですが、そのことに気づいて教師として見ようとしたのはいい判断です。」

「ありがとう。」

彼は褒めてもらえたのが嬉しいらしく笑顔になった。

（・・・面倒な人）

私はコロコロ顔が変わる自分の兄に心の内でため息をついた。

ｓｉｄｅ　―――

それからしばらくトラップ（問題）をかい潜り、石像があるところまでたどり着いた。ネギは魔法の本を見つけてはしゃいでいる。そしてゴーレムが動き出しゲームが始まった。生徒だけでやらなきゃいけないらしい。そして最後の問題で『おさら』の『ら』を明日菜とまき絵が押そうとした時。

「それ押すの待ってください！」

アリサが押すのを止めた。

ｓｉｄｅ　明日菜

私たちが最後の文字を押そうとしたらアリサちゃんに止められた。

「アリサちゃん、どうしたの？」

触る直前になにかに引っ張られた。これはアリサちゃんの糸だ。

「生徒だけのルールじゃが？」

「そちらが不正を行ったのですが？」

「フォッ！！」

アリサちゃんがそういうとさっきまで『ら』のボタンだったところが『る』にかわっている。

「こんな茶番付き合っていられません。皆さん帰りましょう。」

「でも、魔法の本が！！」

「ん？これのことですか？中はただのテキストですよ。」
「「「いつの間に！！」」」
「さっき糸を使って取っておきました。」
私が本を持っていたことを驚いていたが、ここまでに来る途中でも糸を使っていたので納得したようだ。中身はさっき影から取り出したテキストとすり替えておいた。

「というわけで帰りましょう。ここに来るまでの問題で自信ついたでしょう？」
「そうね、ただのテキストだったんならこれやってる意味ないもんね。」
「そやね。帰ろか。」
「結構自信ついたもんね。」
「私は面白そうだったからきたアルシ。」
「拙者も。」
「長い一日だったです。」
それぞれが帰ろうとする。
ドスン。
するとゴーレムが適当なボタンを押した。すると地面が崩れはじめた。
「えっ・・・キャーー！！」

side　アリサ

「ふう、なんとか間に合ったです。」
私は落ちそうになったみんなを糸で捕まえていた。ゴーレムは邪魔されないように縛ってある。とりあえず魔法を使うわけには行かないので力のある明日菜さんと古　菲さんを引きあげる。その間ほかの糸はそこらの柱に繋いでおく。

「アリサちゃんありがとう。危機一髪だよ。」
「助かったアルヨ。」
「いえ、それよりもほかの方々を。」
「「うん。」」

ｓｉｄｅ　木乃香

いやアリサちゃんのおかげで助かったわ。でもあの糸なんだったのやろ。アリサちゃんはピアノ線言うとったけど。まあえ今はそれよりも・・・

「さてこのおそらくロボットの石像をお仕置きしましょう。《さて学園長覚悟はいいですね？》」
「フォッ！！《術が解けん・・・そうか解除は三日後の予定じゃったから。》」
「じゃあ皆さんで一斉攻撃《それは好都合。あっ、ちなみに痛覚は学園長が受けるように術式変更しましたから》。」
「「「おぉーー。」」」

「フォッ！！《何じゃと！》」

それからは縛り付けているゴーレムを殴ったり蹴ったり手裏剣で攻撃したりどこから出したかわからないトンカチで攻撃したり、落書きしたりしていた。

私が攻撃したら問題になるので見て楽しんだ。

翌日、学園長は怪我と言った怪我はないのに痛みに悶えていた。回りからはついに狂ったかと思われていたそうだ。

9時間目「図書館島」（後書き）

ワルツ「主、機嫌がいいみたいだニャ」
アリサ「ええ、あのジジイを間接的にもボコれたので。」
明日菜「アリサ、口調が悪くなってるわよ。」
アリサ「あのジジイにはこれで十分です。」
ワルツ・明日菜「まあ、確かに。」

１０時間目「チャチャゼロ」（前書き）

どこでチャチャゼロを出そうか悩んでたんです。かなり強引になりましたが。

１０時間目「チャチャゼロ」

ｓｉｄｅ　アリサ

テストの結果、学年一位だったです。そして春休みに入ったのですが。

「しばらくぶりですね、私に向かって来る刺客は。」

用事があって学校に行って、終わったのが夕方だった。それから今日は料理当番なので買い物をして帰って夕食を食べたらエヴァさんのところに行く予定だったのに。

「お前がアリサ・スプリングフィールドだな？上の命令に従いお前を抹殺する。」

そこには、ロープを被った男がいる。その男は術式を浮かべあげて魔物を召喚する。その数約二百。

（どうしましょう、こんな団体さんの相手初めてですね。魔法無効化能力で送り還しましょうか？・・・いえこの程度必要ありませんか。こちらの手の内を見せたくありませんから。）

メガロメセブリア元老員からの刺客というのはわかってますし。

「悪いな嬢ちゃん、あんたに怨みは無いけど仕事やから。」

・・・魔物なのに関西弁？まあどうでもいいか。

「仕方ありませんよ。では殺り合いましょう。『アデアット』」
私は糸での実戦をしてみようと思いアーティファクトを出し、魔力と殺気を放つ。
「威勢ええのう嬢ちゃ・・ほえ？」
ズドーン！！
魔物たちが突っ掛かって来そうになった時先頭にいた下級の魔物が大胆にこけた。
「何しとんのや！！」
「いや、何か引っ掛かってな。」
アーティファクトを出してすぐに張っておいた糸におもいっきし引っ掛かった。罠成功！！この隙に術者も含めて攻撃をする。
「【魔法の射手・連弾・雷の２０９矢】」
「しもた！！」
一発で送り還せる程の魔力を込めた矢が魔物たちに向かう。一体に一発当たるようにコントロールし術者は死なない程度のをお見舞いしました。術者は一回避けましたが私が折り返させたのには気づかず命中しました。追尾？そんなの必要ありません。魔力を感じて居場所は分かりますから。
「アリサ！！」
「大丈夫かい！！」
「刹那さん！！真名さん！！」

私が術者を縛り上げた後で真名さんと刹那さんが駆け付けてきたので私も駆けて二人に飛びついた。

ｓｉｄｅ　刹那

アリサの帰りが遅いと思って真名と迎えに行こうと思ったら、急にアリサの魔力を感じたので急いで魔力の感じる場所へ向かった。するとそこには男を縛り上げたアリサがいた。目立った傷は無い。私たちは声をかける。

「アリサ！！」
「大丈夫かい！！」
「刹那さん！！真名さん！！」

私たちが駆けて行くとアリサも走って抱き着いてきた。

「怪我は無い？」
「うん。」
「アリサちゃーん！！」
「なんだもう終わったのか。」「マスター・・・」

こちらも魔力を感じたのか、エヴァさんと明日菜さん茶々丸さんと茶々丸さんに抱かれている人形。

「明日菜さん！！茶々丸さん！！エヴァさん！！」
「なにどうしたの？」
「無事だったみたいだな。」

「マスターがこの中で一番心配していたのに・・・もちろん私たちも心配しました。」
「茶々丸余計なことを言うな。巻くぞ？」
「あっ／／マスターちょっと待っアァ#○◆※☆○†∽／／／／／」
「ケケケ、オマエガアリサカ？」
「ハァ、ハァ」
「そうですが、その前に茶々丸さん大丈夫ですか？」
明日菜さんは本気で心配している。エヴァさんに巻かれた茶々丸さんは色っぽい声を上げている。それとあの人形何？

side　明日菜

エヴァちゃんが茶々丸さんのぜんまいを巻いた後、
「「「「ところでその人形なんですか？」」」」
皆が揃って質問した。
「こいつはだな、私の最初の従者のチャチャゼロだ。」
「ヨロシクナ。」
事情を聞くと封印のせいで魔力供給が出来なくなり、忘れられてたらしい。
「ヒドイトオモワネエカ？」

今も動くことが出来ないらしい。私はふと思いだし影からネックレスを取り出してチャチャゼロさんにかけた。

「ナンダコレハ？」

「自然界の魔力を集める魔法具です。思いつきで作り始めて最近成功品ができたの。」

「なんでまたこんなものを？（欲しがりそうな奴がいっぱいいるな。）」

エヴァが欲しそうな顔をしていた。そりゃそーですよねこれがあれば魔法溶媒なんて使わなくてすむんですから。

「これに術式組み込んで転移専用と浮遊術専用を作ろうと思ったんだけど宝石の容量がたりなくてどうしようかと悩んでたの。」

「ああ、あの時作ってた奴かい？」

真名さんが尋ねてきた。

「真名さん何か知ってるの？」

「ああ、前にアリサに頼まれたんだ。魔法具を作るにばれにくいばしょは無いかって。それで銃を置いてるところに連れて行って道具やら試作品やらを置かせてあげた。すごいよあの精密さは。」

「今度見に行っていい？」

「べつに構いませんが、それよりチャチャゼロさん動ける？」

私はチャチャゼロさんが動けるか確認をしたかったので聞いてみた。

「オ！？カラダガウゴク！！」

チャチャゼロさんは手足を動かしている。

「まだそんなに溜まってないと思うから、飛び回ったりは後でやってね。」
「オウ、アリササンキューナ。ソレトコレナンダ？」
そういってチャチャゼロが転がっている（術）者を指す。
「おそらくアリサ先生を襲った刺客だと思われます。」
いつの間にかもとに戻っていた茶々丸さんが私の変わりに説明した。
「「「「何？」」」」
その後学園長室に死にかけた男が強制転移で送られたとかなんとか。
その後アリサに向かって来る刺客がいなくなったらしい。

１０時間目「チャチャゼロ」（後書き）

チャチャゼロ「フウ、ヤットデバンガキタゼ。」
ワルツ「まあ忘れられてたからニャ。」
チャチャゼロ「ナンダオマエ？キッテイイカ？」
アリサ「ダメですよ。これでも一応神木・蟠桃の意思ですから。」
チャチャゼロ「アア？アノデッケエキカ！！」
ワルツ「今はワルツって主に付けてもらってるニャ」
チャチャゼロ「ソレニシテモ、コレスゲエナ。」
アリサ「魔力供給いらないでしょ？」
チャチャゼロ「アア、ホントサンキューナ！！」
ワルツ「あれ、おいら空気？」

１１時間目「とある日常？」（前書き）

・・・うまくかけません。

11時間目「とある日常？」

side　アリサ

今日は仕事だったのだけど、午前中に終わったので新田先生が『アリサ先生は最初からちゃんと仕事をこなしていたので先に上がってていいですよ』と言われた。ここで断るのもあれなのでお言葉に甘えて今日は一人で街をぶらつこうかと思い、更衣室でスーツからワンピースに着替えて（影に入れておいた）玄関を出ようとしたところ黒いスーツを来てサングラスをかけた男を見た。

「ん？何だろ？」

気になって回りの気配をたどると馴染みのある気配が柱の影から感じた。

「着物姿も素敵ですね木乃香さん。」

「えッ！あ、アリサちゃん！？」

そこには、おめかしをして着物を来ている木乃香さんがいた。

「ちょうどよかった。助けて貰えんか？今追われとるんよ。」

「追われてるってあの黒い男の人たちですか？」

「そうなんよ。おじいちゃんがお見合いをさせるって言ってきてな、私はそれが嫌やから逃げて来たんよ。」

「なるほど大体理解できました。（あのジジイお折檻が必要ですね。）」

「やっと見つけましたよお嬢様。」

ｓｉｄｅ　アリサ

アリサちゃんが状況把握をしていると男数人に見つかってしまった。

「さあ、行きましょう。」

「嫌やあ！！」

男の一人がうちの腕を掴んで無理矢理連れて行こうとする。うちは必死で抵抗するがズルズル引っ張られる。

ドコッ！

突然そんな音が聞こえたと思ったらうちを引っ張っていた男が横に吹っ飛んだ。

「嫌がっている女性を無理矢理連れて行こうとする。・・・最低な男ですね。それをさせる糞ジジイ許しません。」

「へっ？」

アリサちゃんから黒いオーラが出ているのがわかる。だけどうちはそれが頼もしく感じる。

（そういえば・・・）

麻帆良に来た当時最初に聞いた彼女の性格を思いだした。

『女性に対して失礼な人が嫌い』

それが、最初に聞いた彼女の性格。

ｓｉｄｅ　アリサ

木乃香さんを無理矢理連れて行こうとしたので跳び回り蹴り（二回転）を脇腹にお見舞いしました。この時初めて思いました。『魔法を使わない格闘技をやっていてよかった。』と。

「なんだお前は！！」

男の一人が聞いて来た。

「嫌がる生徒を連れて行こうとした男を蹴り飛ばした担任の先生です。」

「なっ！？」

どうやらさっきの動きが見えなかったようですね。この人たちに怨みはないので引いて貰いますか。私は一人に近づき相手の手に札束を握らせる。

「どうでしょう？ここはこれで引いてくれませんか？」

「は、はい！！」

男たちは大急ぎで帰って行った。そして子ども先生、特に女の子の方は怒らせてはいけないという噂が広がるのはまた別のお話。

ｓｉｄｅ　木乃香

アリサちゃんはほとんど一撃で男を帰して行った。さっきの攻撃なんとか見えた。

「アリサちゃん格闘技してたんやね。」

「見えたんですか？」

アリサちゃんはうちが見えたことにびっくりしていた。

「うち明日菜の全力疾走追えるんよ。最初はきつかったけど馴れてもうたわ。」

「動体視力良いんですね。」

そして、どういう競技かと聞いたら答えてくれたわ。

バリツやっけ？打つ（殴る蹴る）投げるキメる（関節）の競技が合わさった日本で言う柔道、空手、合気道が合わさった感じのものらしい。

「今日はありがとな。」

「いえ、当然のことをしたまでですよ。後で学園長にはお灸を据えておきます。」

「その時はうちも連れてってくれん？うちもおじいちゃんにはっきし言うときたい。」

もう自分の倍以上の歳の人とのお見合いなんて嫌やからね。

「そうですね明日にでも行きますか。今日中に言うことをまとめておけば良いですから。」
「そやね、ほなこれからどないしよか？それと仕事終わったんやろ？いつもどおりの喋り方でええよ。」
「私は街をぶらつこうと思ってるんだけど？木乃香さんも一緒に行く？」

やっぱりこっちの方が落ち着くわ。アリサちゃん最初は固かったけど、一緒にお菓子作りしとったら打ち解けてこの喋り方にしてもろた。仕事中なら仕方ないけど歳もそんな離れてへんし妹ができた気分や。

「行く！！」

うちもアリサちゃんと街を回ることにした。

「じゃあとりあえず着物から着替えなきゃね。」
「そやね。一旦寮に戻らなあかんな。」
「急ごう？」
「うん。」

ｓｉｄｅ　―――

アリサと木乃香はその後ショッピングを楽しんだ。いつものごとくアリサは木乃香の着せ替え人形になったり。アクセサリーショップに行ってアリサが唸っていたり。次に行こうとしている途中賑やかな一角があった。

ｓｉｄｅ　アリサ

「あれ、亜子とアキラやない？」
「あっ、ホントだ。」

何か気になって来たら睨み合っている男が二人にそれを見てオロオロしているアキラと亜子がいた。

「行ってみよか？」
「んー？これでも一応教師だから生徒どうしの喧嘩は止めなきゃな。はあ。」

楽しくショッピングのつもりできてこんなことが起きるとは。

「とりあえず二人のところにいこか？」
「はい。」

ｓｉｄｅ　アキラ

今日は部活が休みだったから午前中から亜子とショッピングに来ていた。道を歩いていたら亜子と目の前で睨み合っている男の片方にぶつかってしまい亜子がおもいっきり謝っていた。その様子をもう一人の男がナンパと勘違いし言い争いになって今の状況に至る。もちろん止めたが、両者とも言うことを聞かない。

「ちょっと、待ってくだ「うるせぇ！！」キャッ！！」

「アキラ！！」

勘違いしたほうの男を止めようとするが弾かれて尻餅をついてしまった。亜子が駆け寄って来る。

「アキラさん、大丈夫ですか？」

肩にポンッと小さな手が置かれる感触がした。振り向くとそこにはアリサ先生がいた。

ｓｉｄｅ　アリサ

（勘違いの上に女性に手を挙げるなんて、許せませんね。）

私はの苛立ちは頂点に達した。ジジイのせいで溜まったものもここに来て苛立ちにプラスささって抑えている魔力が解放しそうになるぐらい。

「アリサ先生？」

喧騒に入るところでアキラさんに止められる。

「大丈夫です。」

「でも！！「アキラ今アリサちゃんを止めん方がよかよ。」

アキラさんが私を止めようとするのを木乃香さんが止める。私は気にせず勘違いしたほうの男の前に歩い行く。

「何だい嬢ちゃん危ないから下がって――「成敗！！」グハッ！」
私は一気に距離を詰め男の鳩尾をおもいっきし殴る。男は軽く３ｍ吹っ飛ぶ。その際骨の折れるような音がした。後々何か面倒事が起きると嫌なので手が離れる瞬間に気で治療する。この間わずかコンマ５秒。

「女性に手を挙げた報いです。」
『・・・』

回りの観客がシンとする。それを気にせずに木乃香さんのところに向かう。

「行きましょう。皆さん。」
「「「う・・うん。」」」

そういうと私たちはショッピングに戻るためにその場から離れた。

『キャーー！！』
『何！？あの子！！』
『すごく綺麗！！そして強い！！』
『あれじゃない？噂の・・』
『ホント！！』
『私あの子の勇姿に惚れたわ！』

そんな声が後ろから聞こえて来た。この後アリサのファンクラブができたらしい。アリサがそのことを知るのはまだ先のことである。

ｓｉｄｅ　アキラ

木乃香にアリサ先生を止めるのを止められた。最近ストレスが溜まっているらしい。原因は学園長やネギ先生のことプラスしてあの男の対応らしい。木乃香はたまにアリサ先生の愚痴を聞いているらしい。私はアリサ先生はいつも悩み事なんて無いような顔をしていたので気がつかなかった。でも、ストレス解消とは言えあの中に入っていくのは危険だと思う。

「大丈夫やよ。アリサちゃん格闘技やってるようやし。」

「「えッ！」」

私も亜子も驚いた。あんなに華奢（本人には失礼だが）な体で格闘技をやってるとは思えなかった。

ズザザザザッ！！

「「へっ？」」

「ほらな。」

男が地面を滑って来た。しかも気絶している。

「女性に手を挙げた報いです。」

『・・・』

アリサ先生が何かつぶやいた。それは私たち女性にとってとても頼もしい言葉だった。回りの人々、特に女性は感激していた。私もその一人に入っていた。

「行きましょう。皆さん。」
「「「う・・うん。」」」
声をかけられて現実に戻った。アリサ先生の顔はさっきより清々しかった。アリサ先生について行くと歓声が聞こえて来た。アリサ先生が気にしてないので私たちも気にせずあるいていった。

side　木乃香

うちらは今ある喫茶店にいる。理由はアリサちゃんがここで新発売のスイーツを食べたい（当初の目的）と言って頼んで待っている。どうやら結構時間がかかるらしいわ。
「アリサ先生ってなんで格闘技始めたの？」
「んっ？」
紅茶をストレートで味わっているアリサちゃんにアキラが尋ねていた。
「「それうちも知りたい！！」」
亜子とハモりながら聞いた。
「そうですね・・・自分の身を守るため・・・ですかね。」
アリサちゃんはティーカップを振って紅茶を波立てそれを見つめながらいった。この時アリサちゃんの目を見てうちは少し後悔した。

目が寂しそうやったから。アキラもその目に気づいたみたいや。
「もしかしてアリサ先生可愛いから小さいながらにもナンパされるからそれに対抗したの？」
「まあ、そんな感じですね。」

ｓｉｄｅ　アキラ

私は後悔していた。アリサ先生の寂しそうな目を見て『なんで私はこんな質問したのだろう。』と思っていた。それに気づかず亜子はアリサ先生に質問している。

「わかるわかる。私も男やったらアリサ先生に襲いかかっていたかも。」
「ハハハ、冗談はやめて下さいよ。・・その目怖い。」
「んっ？冗談やないよ。」

アリサ先生は笑っている。私には無理に笑っているようにしか見えなかった。

「お待たせいたしました。ＤＸフルーツパフェです。因みにこちらは３０分以内完食いたしましたら景品が尽きます。」

店員がアリサの頼んだスイーツを持って来た。それは明らかに一人用ではない容器に、バナナ、キウイフルーツ、パイナップル、チェリー、イチゴ等の様々なフルーツで飾られたパフェだった。
さすがにこれは・・・と思いアリサ先生を見るとさっきまでのが嘘

のように目がキラキラしていた。さっきのギャップでとても可愛いと思った。

「先生いける？」

「いけるかどうかじゃありません。いくんです。」

『おお、あれが出てから一週間いままで誰もクリアできなかったあれの挑戦者じゃ。』

『マジか！！ってあの子さっき広場で男を吹っ飛ばした子じゃないか！！』

『キャー！！アリサちゃん今の台詞カッコイイーー！！』

後ろから何やら聞こえてきた、アリサ先生はすでに有名人のようだ。

私は少しモヤモヤしていた。

（ハッ／／／私ったら何女の子に――）

――嫉妬しているのだろう。

ｓｉｄｅ　亜子

今、アリサ先生がＤＸフルーツパフェを食べはじめて２０分や。

（ほんま、どこにこんなに入るんかな？）

軽く１０人前くらいのパフェだったものがすでに2、３口まで減っている。

「すごいな。」

最初こそ大丈夫かと心配したけどいらないことだった。

カランッ。

スプーンが置かれる音がした。

「ごちそうさまでした。」

食べ終わったようだ。アリサ先生はナプキンで口の回りを拭いている。すると、

『キャーーー！！完食したわ！』

『景品ってなんだ！？』

『さすがアリサちゃん！！』

大勢がアリサ先生を賞賛している。

（いつの間に増えたんやろ？）

アリサ先生は回りを気にもとめず、ちっちゃい袋に入った景品を受け取っている。

「景品って何やった？」

木乃香がアリサ先生に聞いている。それは私も気になる。

「ちょっと待って・・・」

アリサ先生は包装を解いて中身を見る。

ｓｉｄｅ　アキラ

「うわー。キレー。」

中から出て来たのはガラスでできた三日月が飾りでついたネックレスだった。アリサ先生は光を透かして見ている。その動作が可愛いと思ってしまう。

「ガラス細工かぁ。」

「光を通すととっても綺麗。」

「ほんまや。」

木乃香と一緒にネックレスを眺める姿が姉妹のように見えてうらやましい。

「・キラ、アキラ！！」

「っ！！何！？」

「どしたの？ボーッとして？」

亜子が心配そうに見ている。

「な、なんでもないよ！？」

私は慌てて反応した。

「ふーん？ならいいけど。そろそろ帰ろうだって。」

「あっ、うん。」

なんか亜子の顔がにやけていたような気がした。うんっ！！見なかったことにしよう。

side　―――

その後、寮に帰ってアキラがアリサのことでからかわれたのは言うまでもない。

いっほ寮に帰ったアリサは刹那に昼間のことを伝えた。すると刹那は凄い形相で部屋を出ていった。翌日、木乃香とアリサが学園長室にいった時、学園長が気絶していてところどころに白い羽根がささっていたらしい。

アリサはストレス解消アイテムが使えなくなっていたことに不満げだったが弟子も最近ストレスを抱えてるのは感じていたので見過ごすことにした。

11時間目「とある日常？」（後書き）

チャチャゼロ「オウオウ。俺ノ出番ガネエジャネエカ。」
ワルツ「仕方ないニャ。作者は非日常のじゃない日常を書きたかったみたいだから。」
チャチャゼロ「ソレニシテモヨウ。刹那ノヤツ学園長切リニイクンナラ俺モ誘ッテクレレバナァ。」
茶々丸「姉さん、桜咲さんにも譲れないものもありますよ。」
チャチャゼロ「オウ。茶々丸ジャネエカ。ドウシタ今アリサト”二人キリ”デノ料理研究ジャナカッタノカ？」
茶々丸「な、何のことですか／／／今はただ生地を寝かせているだけですよ！？」
ワルツ「二人きりってところは否定しないんだニャ。」
茶々丸「えッ！？えッ？・・・・ボン！！」
ワルツ「わー！？茶々丸が壊れたニャー！！」
チャチャゼロ「気ニスンナ。オーバーヒートシタダケダ。」
ワルツ「気にしなきゃ駄目だニャー！！」
チャチャゼロ「ハア。平和スギテツマンネエ。」

１２時間目「さよ」（前書き）

月読「どうも作者の月読です。今回から前書きと後書きの書き方を変更します。」
アリサ「その前に言うことがありますよね？」
月読「更新がかなり遅れてすみませんでした！！ｏｒｚ」
アリサ「よろしい。」
月読「更新不定期とは載せてあるけどすみませんでした。ｏｒｚ」

三分経過

アリサ「ちょっといつまでこうやっているんですか！？」
月読「・・・ｏｒｚ」

五分経過

アリサ「オーイ。」
ツンツン
月読「・・・ｏｒｚ」

十分経過

アリサ「・・・」

月読「・・・orz」

三十分経過

月読「・・・orz」
アリサ「あれ何か紙がえーっと何々？『作者の反応がないので本編スタートさせてくれ。多分あまりいい文ではないことを伝えてくれ。』だそうです。では本編スタート！！」

12時間目「さよ」

side　――

刹那、明日菜との修業。エヴァとの模擬戦。アキラとのプリント作り。木乃香、のどかとの図書館探索。４月１日には茶々丸の誕生日パーティーをした。最初は遠慮していた茶々丸だったがまんざら出もなく喜んでいた。まさかガイドノイドの自分を祝ってもらえるなど思っていなかったのだろう。いろんな意味で忙しかった春休みも残すところも後一日。アリサたちの寮にあるものが届いた。

side　真名

朝食を済ませた私たち。アリサはなんだかんだ言って日曜以外毎日学校で仕事をしていたので、『最終日くらいは・・・』と回りの先生が気を遣ってくれたらしく休みだそうだ。そのため何をしようと悩んでいた矢先ある荷物が届いた。

「やっと届いた！」

アリサが頼んでいたものらしい。

「なんだい、それは？」

「ホンムクルスです。新品を二つ。」「何に使うのですか？」

刹那も気になったらしく先にアリサに聞いた。

「まっ、それはお楽しみということで今日の予定は決定。」

side　刹那

アリサはホンムクルスを影に仕舞うと玄関を飛び出していった。私たちも急いで後を追った。

「アリサ、どこに行くんだ？」

「この時間帯ならコンビニかな？」

正直何を言っているのかわからない。アリサを追いかけて行くと学園の近くのコンビニについた。

「いたいた。」

アリサは目的の人物を見つけたようだが、その視線の先にはなんにもない。

「さーよさん！！」

「これは！私の魔眼でも気づきづらいな。」

アリサが何も無いところに話しかけている。何も見えないことに疑問を持った真名が魔眼を使っても見えづらい何かを見つけたようだ。

「アリサその子は誰だい？」

「あっ！二人にも紹介しなきゃね。」

何やら話し込んでいたアリサが真名に言われて見えない何かを掴んで目を閉じた。すると白い髪に薄い肌色な旧式の制服をきた少女がうっすらと見えてきた。特徴は足が無い！？

「えーと・・・」

「こちらは出席番号１番の相坂さよさんです。」

『よ、よろしくお願いします。』

状況が今一掴めないでいるとアリサが紹介をしてきた。

「「・・・はっ？」」

ｓｉｄｅ　さよ

私は相坂さよ。６０年間幽霊してます。私、幽霊の素質が無いらしく誰にも気づかれたことがありません。今日は春休みの最終日。明日からあの教室にあの騒がしさが戻って来ます。でも、今日はやることが無いのでコンビニで立ち読みしようと思ったら。

「いたいた。」

２年生の３学期から副担任になった金髪でオッドアイの少女、アリサ先生がいました。後ろには真名さんと刹那さんがいる。誰かを見つけたようですがまあ私ではないでしょう。

「さーよさん。」

呼ばれたみたいです。回りを見回して見ますが、アリサ先生の目線の先には私しかいないということがわかりました。

『私が見えるんですか！？』
「うん！ハッキリクッキリ。」
『えッ！でも教室では・・・』
「ちょっと訳ありでね。」

アリサ先生は最初から見えていたらしい私はその訳を聞こうとする。

「アリサその子は誰だい？」
「あっ！二人にも紹介しなきゃね。」

一緒に来た片方の方（・・・たしか龍宮真名さん）が聞いてきた。アリサ先生は思い出したようにいうと私の手を握って来た。龍宮さんが私を見れるのとアリサ先生が私に触れることに驚いていると、

「今からさよさんを実体化させるために魔力を流し込みます。最初は変な気持ちになるだろうけど我慢してくださいね？」
『は、はい！！』

アリサ先生がそういうと私の身体に何か暖かいものが流れて来た。するともう片方の方（たしか桜咲刹那さん）にも私が見えたようで困惑している。

「えーと・・・」
「こちらは出席番号1番の相坂さよさんです。」
『よ、よろしくお願いします。』

とりあえず紹介されたので挨拶をした。

「「・・・はっ！？」」

間の抜けた声が聞こえてきた。

閑話休題

私は今頭がフリーズしている。アリサ先生が説明していた。私が６０年間ずっと２－Ａにいたこと。どうやってしったかと言うと図書館島で過去の資料をあさったらしい。どうやら事件に巻き込まれて死んでしまったらしい。私は記憶がないからわからないが。因みどんな事件か聞こうとしたらアリサ先生は口を濁して、

「忘れているなら忘れたままのほうが幸せです。残酷です。」

と、言っていた。顔にもその表情が出ていたので私は聞くのをやめた。その説明の後の言葉が問題だった。

「さよさん、身体が欲しいですか？」

そうこの言葉、言っていることがよくわからなかった。

『身体？』

「ええ。実際に言うとホンムクルスです。ホンムクルスにあなたの霊体憑依させ私と契約することによってあなたの身体とします。」

ｓｉｄｅ　アリサ

私は初めてさよさんを見たときさよさんは寂しそうな目を見てホンムクルスを頼んだ。あの目は私も昔していたその目より孤独の目だった。

『また、気づいてもらえるようになるんですか！？』

「はい、ただし契約者が死なない限り死ぬことはできません。即ち私が死なない限り死にません。そして私は真祖、そう簡単に死ぬことはありません。何十年、何百年と生きることになるかもしれません。それでもいいですか？」

さよさんの反応ですでに答えはわかっているがあえて聞いてみた。その言葉に少し考えたようだがさよさんは答える。

『はい。ここで私がならなかったらアリサ先生がずっと一人と言うことになりませんか？』

「！！」

そういえば、さよさんは知らないんだった。私には側にいてくれる人はいる。だけど知らないけどそういう考えを持てるさよさんは凄いな。側にいる真名さん、刹那さんもさよさんの考え方に驚いているようだ。

『私は幽霊です。今までは消えずにいれたけれどこれからはどうかわかりません。だから身体を貰う変わりにアリサ先生を支えていきたいです。』

「ふむ、いい考え方だな。」

すると後ろからエヴァさんの声が聞こえた。

「エヴァさん！！」
「どうしてここに？」
刹那さんと真名さんがいきなり現れたのにびっくりしている。
「昼間っから認識阻害の結界を張って何やっているかと思ってな。」
「マスターはまたアリサ先生の魔力がいきなり結界に囲まれたのを感知してアリサ先生がまた狙われたと思って心配してました。」
「なっ！！茶々丸お前言って「私も心配になって家事をほったらかしにして来ちゃいました。」
「／／／あ、ありがとう。」
なんか茶々丸さんがいつもと違うけど心配してくれたことに感謝する。
「はぁ。まあ、いい。それで、別荘を使うんだろ？」
茶々丸さんの変化が嬉しいのかエヴァさんは茶々丸さんの言ったことを流した。
「あ、はい。さすがに寮だと狭いし時間もかかるので。」
「ならさっさと行くぞ。」

ｓｉｄｅ　さよ

『ほえー』

今、エヴァさんの別荘に来ています。というか、あれお城ですよね？

「やっぱり驚きました？」
『魔法使いはこの目で見ていたので驚きませんがやっぱりこういうのは。』
「久シブリダナアリサ、殺リ合オウゼ。」
「はいはい、後でね。」
「流サレタ！！」

可愛い人形が物騒なことをいいながら飛んできたがアリサ先生の華麗なるスルーで墜ちた。

「では、始めましょうか。」

アリサ先生が指を鳴らすといきなり消え身長が高くなった。刹那さん曰く身体が小さいと便利なこともあるけど不便なこともあるらしい。エヴァさんに幻術を教えてもらってからはたいてい別荘の中ではこの姿でいるらしい。真名さん曰くただ単に大きな姿でいたいだけらしい。余談ではあるが明日菜さんと高畑先生が大きくなったアリサ先生を見てある人と勘違いしたらしい。

「さよさんこれに憑依してください。そのまま霊体を身体に縛り付けます。」
『は、はい！！』

考えているうちに準備が終わったようだ。

「呪文を唱えたら五感がシャットダウンされます。その後どんな契約でもいいので契約すると徐々に五感が戻って来ます。この呪文は失敗するとさよさんの霊体が消えるかもしれません。それでもやりますか？」

アリサ先生が真剣な眼差しで見つめて来る。これが最後の確認らしい。失敗したら消える。

『もし消えたとしてもそれが私の運命(さだめ)。消えたら消えたで新たな生が待っているだけです。私ここに来てわかりました。ここで何もしなければ始まらない。ここが”出発地点”だと。』

私はありのままの想いをアリサ先生に伝えた。すると、真剣な表情が綻びフッと笑いながら、

「その想い、確かに受け取りました。」

『ドキンッ!!』

その和らかな笑顔に心が躍った。

(はわわわわ///私どうしたんでしょう?顔が熱いです。)

「じゃあいきますよ。」

『は、はい!!』

アリサ先生が呪文を唱えはじめると私は流れてくる魔力を受け入れながら意識を落とした。

side　茶々丸

ただいまアリサ先生がさよさんに身体を与える呪文を発動させました。するとホンムクルスの形が変わり先程アリサ先生が魔力で実体

化させていたさよさんの身体の形になりました。そして今、仮契約をするところです。

「マスター、そろそろお昼の準備をしに行きます。」

少し早いが昼食の準備する。

「ん？ちょっと早くないか？」

「さよさんの歓迎会をやると思うので準備をしようかと。」

「・・・そうか。」

マスターは何か考えるような仕草をしてから答えた。ちょっとニヤけたのは気のせいでしょうか？

「さて、何を作りましょうか。」さよさんが新しい身体を貰うのは友達が増えるので嬉しいです。それにアリサ先生は真祖になって魔力量は増えたけどまだ慣れていないため封印具も使ってで少しずつ調整しながですから疲れているでしょう。ちなみに、一度マスターが全部解放させて力任せに一番慣れている風系の魔法を使わせたら海が前方約５０？、幅１００ｍにかけて割れました。

マスター曰く、「熟練したら前方５００？、幅１？はいけるな。ちなみに私は全力ならその範囲凍らせることは可能だ。」と言っておりました。

話しがズレました。さて何にしましょうか？６０年前の日本は終戦手前のはずですからね。やっぱりご飯が一番ですね。後は刺身・・・いっそのこと刺身の盛り合わせなんかはそれとも天ぷら・・・

ｓｉｄｅ　エヴァ

「オウ終ワッタナ？ジャア早速ヤリアオウｚ「はいはい。」ウオッ！」

チャチャゼロがアリサに近寄っていったら、アリサが障壁の強度を瞬時に強くしてチャチャゼロの攻撃を弾いた。その後ほかの部屋で休ませるためさよを抱えてチャチャゼロをあしらいながら部屋を出て行った。

「あれは中々いいコントロールだね。チャチャゼロが攻撃したところだけ強度を強くしたようだし。」

「ああ、あそこまでだと綺麗を通り越して恐ろしいな。」

いつの間にか隣に来ていた真名がアリサの障壁についていってきたので自分の意見を言う。

「真祖であるあなたでもそう思いますか。」

「何を言う、あいつもすでに真祖だぞ。」

「違いないな。」

ｓｉｄｅ　アリサ

「さすがに霊体（たましい）を身体に縛り付ける作業は魔力を大量に使うね。」

「本来ならばホンムクルスは魂は自分で育てたり、精霊の仮の身体になる媒介するからニャ。」

さよさんの経過を見ながらワルツと話をする。チャチャゼロは途中で邪魔になったので、渡した魔法具に溜まった魔力を使って転移させました。

「ホンムクルスを主との契約を無しで自立化できないかな？」
「自分で身体を動かす魔力を作れれば大丈夫じゃないかニャ？仮契約だってドール契約だって結局は魔力を供給するためと主従関係をしっかり決めるためのものだし、今回みたいな人の霊体なら身体を動かすぐらいの魔力は作れると思うニャ。」
「えッ！？じゃあ仮契約ってする必要無かったんじゃない？」
「そうでもないニャ。契約は身体と霊体を繋げたあと起動させるための『鍵』みたいなものニャ。」
「鍵かあ。それをなんとかできれば。」
「う・・ん。」

しばらく話し込んでいるとさよさんが目を覚ましたようだ。

「うっ？ここは？」
「身体のほうはどうですか？」
「へっ？・・・痛っ！？夢じゃない！良かったー！！」

さよさんは一度ほうけた顔をすると自分の頬を引っ張って夢じゃないと確認していた。私はその仕草が微笑ましいと思い黙ってみていた。

「どうですか新しい身体は？」
「嬉しいです。いますぐ走り回りたいです。」

そういいさよさんは背伸びをし立ち上がろうとするが、なかなか立ち上がらない。

「どうかしましたか？」
「足が重いです。」
どうやら霊体だったときに足を動かす感覚を忘れてしまっているようだ。それをさよさんに言うと、
「仕方ないですね。これからリハビリです。キャ！？」
少し沈み気味のさよさんをお姫様抱っこする。
「そうですね。でもその前に皆のところにいきましょ？」
そういうと私は部屋を出る。

ｓｉｄｅ　さよ

今アリサ先生の顔が目の前に・・・恥ずかしい。何でこう思うのだろう？この目でしょうか？意志の篭ったこの目に惚れてしまったのでしょうか？きっとそうでしょう。あの目を見たとき胸が高鳴りました。だったら恥ずかしがる必要は無いのでは？
「さて、準備はいいですか？」
あれこれ考えている間に皆が待っている部屋に着いたようです。
「は、はい。」

「「「ようこそ、さよさん！！」」」
「明日菜さん来てたんだ。」
「ええ。アリサの考えに今回は賛成。一人は寂しいもんね。後は皆を巻き込まないようにね。」
「うん。」

アリサ先生私を椅子に座らすとさっきまでいなかった明日菜さんに話しかけていた。その姿は姉妹のようだった。それを刹那さんと真名さんは黙って見ている。

「じゃあとりあえず自己紹介といきましょうか。」

話が終わったようで気分を一転するとささやかながらパーティーが始まった。

１２時間目「さよ」（後書き）

月読「・・・ｏｒｚ」
アリサ「どうしましょう。この人。」
アスナ「アリサーどうしたの急に読んで。」
アリサ「実は・・・」

アスナ「なるほど。声かけても突いても反応無し。しかも本編の間もずっとこうだったと。」
アリサ「どうしましょう？」
月読「・・・ｏｒｚ」

次回に続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0315v/

魔法先生ネギま！～世界を思う少女（仮）～

2011年10月18日22時07分発行